

桜井市  
大福遺跡・西之宮黒田地区  
発掘調査報告書

1987・3・31

桜井市教育委員会

## 序 文

このたび、大福遺跡・西之宮黒田地区の発掘調査報告書を、刊行することになりました。

今回の調査地は、銅鐸出土土地として知られています大福遺跡の南西隅にあたり、桜井市地区改良課の住宅敷地整備事業に先だって、発掘調査を実施したものです。

その結果、白鳳時代の道路跡や、建物・井戸跡などが検出されました。従来の藤原京域の外にも、都市計画がなされていたことがわかります。近年、このような遺構の発見が増加し、藤原京の範囲の拡大が予測されていますが、本報告書が、その一資料として活用されれば幸いです。

調査に御協力をいただいた関係者各位、ならびに地元の方々に厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月30日

桜井市教育委員会

教育長 外嶋尚春

## 例　　言

1. 本報告書は、桜井市地区改良課による住宅敷地整備事業に伴う事前調査として実施した桜井市大字西之宮287の2番地外に所在する大福遺跡・西之宮黒田地区の発掘調査に関するものである。

2. 調査は、桜井市教育委員会社会教育課文化財係、技師清水真一、嘱託技師橋詰清孝が担当した。

3. 本報告書の編集は、桜井市教育委員会社会教育課文化財係が行い、嘱託技師・橋詰清孝が担当した。整理作業は、技師・清水真一をはじめ、補助員・家納佳江・小島弘美・藤田佳寿美・柳橋桂子の協力を得た。

4. 樅原考古学研究所・奈良国立文化財研究所藤原調査部から調査の指導を受け、検出遺構について、秋山日出雄氏・阿部義平氏・木下正史氏・岡田英男氏の指導を受けた。また、道路跡の座標計算は、樅原考古学研究所・小澤毅氏に御願いした。記して感謝の意とします。

5. 調査参加者は、以下の通りである。

青木久子・池崎庄次郎・石田敏雄・上西千代造・上室八重子・小田純子・家納佳江・楠本美野子・栗野員雄・栗野正一郎・小島弘美・西條利男・清水真一・杉田直美・高奥ケイ子・高奥久子・武田美津子・武田美代子・田中義清・土井一行・中西善吉・中西幸子・中西智子・内藤新治・西邦和・萩原儀征・平岡高雄・藤田佳寿美・本多元成・松田有司・増田和子・増田義雄・森勇・柳橋桂子・山下秀夫・山本忠雄・山本平一・大西静子・藤井妙子・山本三代子・吉崎文子。

## 目 次

序 文 .....	1
例 言 .....	2
第 1 章 大福遺跡・西ノ宮黒田地区の位置と環境 .....	7
第 2 章 調査の経過 .....	8
(1) 調査に至る経緯 .....	8
(2) 調査日誌抄 .....	8
第 3 章 調査の結果 .....	10
(1) 基本層序 .....	10
(2) 遺構各説 .....	10
S X - 0 1 .....	10
中世素掘溝 .....	12
中世掘立柱柱穴群 .....	12
道路状遺構 .....	15
建 物 跡 .....	15
溝 状 遺 構 .....	19
井 戸 跡 .....	20
(3) 遺物の観察 .....	21
S X - 0 1 .....	21
中世素掘溝及び包含層 .....	24
道路状遺構 .....	26
井 戸 跡 .....	27
第 4 章 ま と め .....	33

## 挿 図 目 次

第 1 図	調査地周辺遺跡図 (1 / 2.5万)	7
第 2 図	S X - 0 1 平・断面図	11
第 3 図	調査区遺構図・断面図	13
第 4 図	S B - 0 1 平・断面図	16
第 5 図	B区藤原京期の遺構 平・断面図	18
第 6 図	井戸跡 (S E - 0 1) 平・断面図	20
第 7 図	S X - 0 1 出土遺物実測図	22
第 8 図	中世素掘溝及び遺物包含層出土遺物実測図	25
第 9 図	井戸跡 (S E - 0 1) 出土金属製品及び木製品実測図	28
第 10 図	道路状遺構側溝及び井戸跡出土遺物実測図	30
第 11 図	井戸跡 (S E - 0 1) 出土遺物実測図	31
第 12 図	井戸跡 (S E - 0 1) 出土曲物実測図	32
第 13 図	藤原京期の遺構	33
第 14 図	藤原京城外北東部の道路状遺構	34

## 図 版 目 次

図 版 1	調査区全景 航空写真	35
図 版 2	上層の遺構 1 SX-01	36
図 版 3	上層の遺構 2 中世素掘溝・中世掘立柱柱穴群	37
図 版 4	藤原京期の遺構	38
図 版 5	道路状遺構 (SF-01)	39
図 版 6	道路状遺構側溝及びSD-03 堆積状況	40
図 版 7	SB-01	41
図 版 8	SE-01	42
図 版 9	SB-02	43
図 版 10	Pit-24・A区検出柱穴	44
図 版 11	井戸跡 (SE-01)	45
図 版 12	井戸跡 (SE-01) 遺物出土状態	46
図 版 13	SX-01 出土遺物	47
図 版 14	SX-01 出土遺物	48
図 版 15	中世素掘溝及び遺物包含層出土遺物	49
図 版 16	道路状遺構側溝出土遺物	50
図 版 17	井戸跡 (SE-01) 出土遺物	51
図 版 18	井戸跡 (SE-01) 出土遺物	52
図 版 19	井戸跡 (SE-01) 出土曲物	53



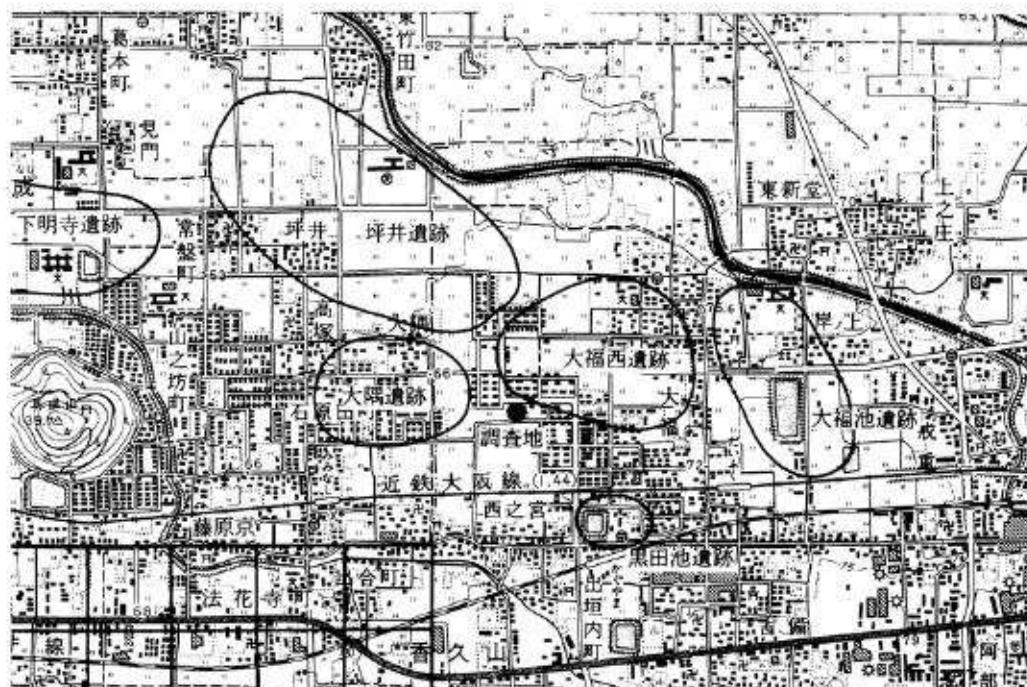
## 第1章 大福遺跡・西之宮黒田地区の位置と環境

奈良県桜井市大字西之宮に所在する大福遺跡・西之宮黒田地区は、奈良盆地の東南部に位置し、西1.2kmに耳成山を、南1.5kmに香久山を望む位置にある。また、藤原京の京極大路である、東京極大路の中ツ道と、北京極大路の横大路との交差点より、北東へ、約600mの位置にある。

調査地の北方には、寺川が、南方には、米川が流れ、両河川に狭まれた、海拔約65mの沖積平野上に立地している。

大福遺跡・西之宮黒田地区は、弥生時代～奈良時代の複合遺跡である大福西遺跡の南西隅に位置する。調査地の北約600mには、昭和49年に、奈良県立橿原考古学研究所によって、調査が実施された大福遺跡があり、弥生時代中期から奈良時代に至る遺構が検出されている。その他、西方には、橿原市常盤町に所在する大隅遺跡は、縄文時代晚期から弥生時代に至る遺物散布地として知られる。北方には弥生時代中期から後期に属する橿原市常盤町の坪井遺跡がある。調査地は、坪井遺跡・大隅遺跡・大福西遺跡の3遺跡の近接地に当り、縄文時代から、奈良時代に至る遺構の存在が予測された。

また、橿原市下明寺遺跡や、桜井市吉備大角遺跡で、藤原京期の道路跡や建物跡が発見されており、大藤原京関係の遺構の存在が注目される地でもある。



第1図 調査地周辺遺跡図 (1/2.5万)

## 第2章 発掘調査の経過

### (1) 調査に至る経過

大福遺跡・西之宮黒田地区の発掘調査は、桜井市地区改良課による住宅敷地整備事業に伴う事前調査である。整備事業地は、桜井市大字西之宮287の2番地外に当る。調査区は、住宅敷地予定地内をコの字状に通る道路敷予定地内上に、設定した。調査費は、桜井市に交付された国庫補助金によった。

調査は、昭和61年8月1日から10月6日まで45日の期間をかけて桜井市教育委員会が実施した。

調査区は、幅5m、長さ22mのA・B区の南北トレンチ2本と、幅5m、長さ45mのC区東西トレンチをまず設定し、必要に応じて拡張した。

拡張区は、幅5m、長さ14mのサブトレンチD区をはじめ、C区中央北へ、幅6m、長さ4m、B区南半分を西へ、7.6m<sup>2</sup>、それぞれ拡張した。総調査面積は、522.6m<sup>2</sup>である。

### (2) 調査日誌抄

昭和61年8月1日(金) 器材を搬入し、調査を開始する。B区から重機によって表土層を除去する。

- 8月2日(土) 重機による表土層の除去。包含層、第3層暗灰色土を確認する。
- 8月4日(月) 重機による表土層除去作業を終了する。
- 8月5日(火) 第3層を精査するが、遺構はB区方形土壙一基のみであった。
- 8月6日(水) 地区割りをし、B区より第3層を人力によって除去。
- 8月7日(木) 第3層から、須恵器・土師器・瓦器片と共に石包丁が1点出土する。
- 8月8日(金) 第3層除去作業は、C区まで終了した。
- 8月9日(土) A区方形土壙(以下、SX-01)を残し、第3層を除去する。
- 8月11日(月) 第4層淡灰黄色土をベースとして、縦横に走る素掘り溝を確認した。
- 8月12日(火) A区から素掘り溝の検出を行う。A区の第4層は遺存度が悪い。
- 8月13日(水) A区精査。素掘り溝に切られた掘方方形の柱穴を確認する。下層の遺構か。
- 8月18日(月) 久しぶりに天候に恵まれる。C区の第4層上面の精査を継続する。
- 8月19日(火) 雨に備え排水溝を掘削。幅1.35mの溝2条の存在を確認。時期は藤原京期。
- 8月20日(水) A区第4層上面の精査。C区北隅を走る溝は、幅80cmもある。
- 8月21日(木) 素掘溝調査前の写真を撮り、掘り下げる。SX-01も調査を開始する。
- 8月22日(金) SX-01は、掘方が2段に掘られている。上層からは、木材片出土。井戸か。
- 8月25日(月) 素掘溝完掘、写真撮影。SX-01は、土層図を取り、さらに掘下げる。

- 8月26日(火) 第4層除去。藤原京期の須恵器・土師器出土。A区では、柱穴数基検出。
- 8月27日(水) S X-01土壤底より陶磁器類出土。第4層除去はほぼ終了する。第4層下は地山。
- 8月28日(木) 第4層下、暗褐色土の地山面を精査、B区で、建物・井戸跡を検出。
- 8月29日(金) C区で、南北に並行して走る2条の溝を検出。道路状の遺構か。写真撮影。
- 8月30日(土) 遺構掘り下げ。S B-01・02完掘、S D-01・02完掘。
- 9月1日(月) 道路状遺構東西両側溝完掘。S E-01には、曲物1基が設置されていた。
- 9月2日(火) 遺構完掘。全体写真を撮影。 $\frac{1}{20}$ 平面図を作成する。
- 9月3日(水) 奈良国立文化財研究所・藤原宮調査部 木下正史氏来現場。御教示を得る。
- 9月4日(木) S E-01の曲物を取り上げる。航空写真の準備。
- 9月5日(金) 航空写真。道路状遺構と、S D-03・04の交差点を調査するため、C区の南に、14m×5mのサブトレンチを設定した。重機による表土層を除去した。
- 9月6日(土) 第3層を除去し、中世素掘溝を確認した。
- 9月8日(月) 中世素掘溝を検出し、掘下げる。
- 9月9日(火) 第4層を除去する。第4層の遺存度が悪く、かなり削平されている。
- 9月11日(木) 地山面にて精査を行うが、S D-03・04は、削平され存在しなかった。
- 9月12日(金) S D-03・04の再精査を行う。S D-03を確認するが、交点を明らかにすることはできない。溝は、両側溝に向い傾斜しており、従来は、取付いていたであろう。
- 9月13日(土) 側溝を掘下げる。上層の暗褐色土中から、須恵器・土師器片出土。
- 9月18日(木) 東側溝の下層は、シルト層の堆積が見られ、植物遺体が出土する。
- 9月20日(土) 国立歴史民俗博物館 阿部義平氏来現場。
- 9月22日(月) 奈良国立文化財研究所藤原京調査部・岡田英男氏・木下正史氏来現場。
- 9月24日(水) 西側溝を完掘。両側溝に護岸等は、認められなかった。
- 9月25日(木) 再精査を行い、写真撮影を行う。S B-01柱穴のたちわりを行う。
- 9月26日(金) S B-02・A区検出の柱穴群のたちわりを行う。
- 9月27日(土) サブトレンチ $\frac{1}{20}$ 平面図を作成する。
- 9月29日(月) 秋山日出雄先生来現場。御教示を得る。
- 9月30日(火) 器材の大半を撤収する。 $\frac{1}{20}$ 平面図完成する。
- 10月2日(木) 記者発表を行う。
- 10月3日(金) 現地説明会の準備を行う。
- 10月4日(土) 午後2時より現地説明会。参加者約150名。
- 10月6日(月) 器材を撤収する。重機によって埋めもどしを行い調査を終了する。

## 第3章 発掘調査の結果

### (1) 基本層序

各調査区土層図を参照してもわかるように、西之宮黒田地区の層位は、基本的に5層に分けることができる。遺構面は、3面を確認している。

第1層耕土（暗青灰色土）・第2層床土（黄灰色土）であり、現水田面の耕作土である。ほぼ水平堆積している第3層暗灰色土は、調査区全ての地区で、厚さ20cm～25cmを有しており、瓦器片・土師器片・須恵器片・陶器片と共に、弥生時代前期と思われる流紋岩製の石包丁（図-32）が出土している。

この第3層をベースとし、土壌SX-01が存在するが、他の遺構は、認められなかった。

第4層は、淡灰黄色土の粘質をおびる土層である。調査区の北西へ行くほど遺存度が悪く、15cm～20cmである。特にA区の遺存度が悪い。第4層あるいは、第5層の地山をベースとして、小規模な素掘溝が確認されている。第4層中には、藤原京期～奈良時代前期と思われる、土師器・須恵器片を包含している。

第5層は、暗褐色土を呈する。第5層以下は地山である。調査区B区及びC区の東半分は、第5層下に灰色粗砂層の無遺物層が存在する。

第5層地山面をベースとして、藤原京期～奈良時代前半の遺構が存在するが、これより古い遺構は、存在しない。

調査区は、ほとんど傾斜がなく、平坦であり、若干、南方向へ傾斜している。

第3層をベースとして形成される第1遺構面土壌SX-01から順に遺構の各説明を述べみたい。

### (2) 遺構各説

#### 上層の遺構

##### ○ SX-01

Aトレンチ中央、西隅で検出された。耕作床土層下、第3層淡灰色土をベースとして、土壌SX-01が存在する。

平面プランは、長方形であり、上部で、長辺1.9m、短辺1.15mを測る。掘方は、ほぼ垂直に、2段に掘られ、土壌底では、長辺1.7m、短辺0.75mの長方形を呈する。深さは、1.2mであり、底から0.2mの位置に段を設けている。段上面の幅は0.1mである。

この段と壁面との間には、板材を立てて、土壌壁面を囲んでいた可能性があり、上部の一部に木材が遺存する。また、土壌の上部は、板材によって覆われていたものと考えられ、木材が土壌内に落込んでいる。

出土遺物は、平坦に掘れた土壌底直上で出土している。土壌底一面に、陶磁器類・鉄製

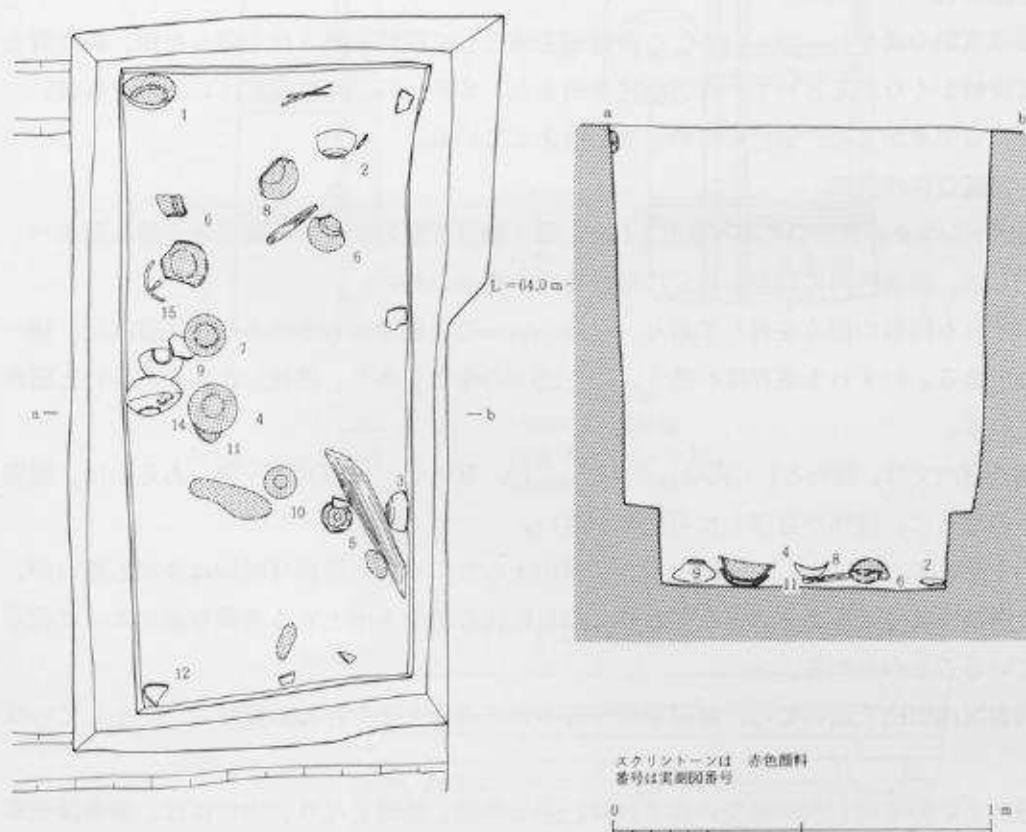
品が出土しており、配置に規則的なものはうかがえない。

また、土壤底数ヶ所に赤色顔料の塊りがあり、磁器碗類の内面にも厚く付着している。特に、土壤北よりに多くの赤色顔料が遺存する。調査中、墓として調査を行ったが、骨等は存在しなかった。

出土遺物の内訳は、染付磁器の飯茶碗1点と、汁茶碗が同一文様のもの7点と、別文様の1点の計8点。そして、湯のみ茶碗1点、盃1点がある。陶器では、徳利・急須が各1点ずつ出土している。また、三徳か五徳かと思われる鉄製品が1点出土している。

いずれも完形か、完形に近い状態で出土しており、破損によって廃棄されたものとしては、考え難い。ただ上層で、羽釜片が出土しているが、直接当遺構に関係するものではないものと思われる。また、赤色顔料は、磁器碗・盃類のみに付着しており、陶器の急須・徳利には全く付着していない。付着の仕方も塗ったようではなく、盛ったような付着の仕方をしている。埋納時かそれ以前に意図的に盛っていたのであろうか。

遺構の時期は、出土遺物から、江戸時代後期から明治時代初期を前後する時期であろう。



第2図 SX-01 平 断面図

土壙の構築が、板材を使用し、覆っていた痕跡があるなど丁寧に築造されていることから単なる器物を廃棄する土壙とは考え難い。

また、出土遺物の内訳から、1人分（1セット）の食生活に有するだけの雑器がそろっていることや、赤色顔料の存在や、ほとんど完形で遺物が出土していることなどから、葬送等の個人の儀礼に使用した雑器を埋納したものと思われる。

当時期に該当する遺構はS X-01のみであり、近世時にも田地であったと思われ、S X-01の立地が注目される。

#### 中世素掘溝

東西・南北に走る素掘溝を第4層淡灰黄色土及び、暗褐色土、地山面にて検出した。概ね、東西方向の溝が、南北方向の溝を切っている。

幅10～25cm、深さ15～20cm前後的小規模な溝が多数を占めている。最大のものでは、C区トレンチの北隅を東西に走るSD-101で、幅40cm前後、深さは遺存度のよい所で、25cmを測る。また、SD-101は、幾度も改修され、中世耕作時の主要な溝となっていたものと思われる。

藤原京期の溝SD-03・04も、この地が宅地として機能を果さなくなった後、耕作溝として改修がくりかえされていた可能性があるが、SF-01の両側溝には、認められない。

これらの溝からは、13世紀代の遺物が出土している。

#### 中世掘立柱柱穴群

B区トレンチの北半分にのみ検出された。第4層淡灰黄色土及び、暗褐色土地山面をベースとして、調査区内に12基の掘立柱建物柱穴を検出した。

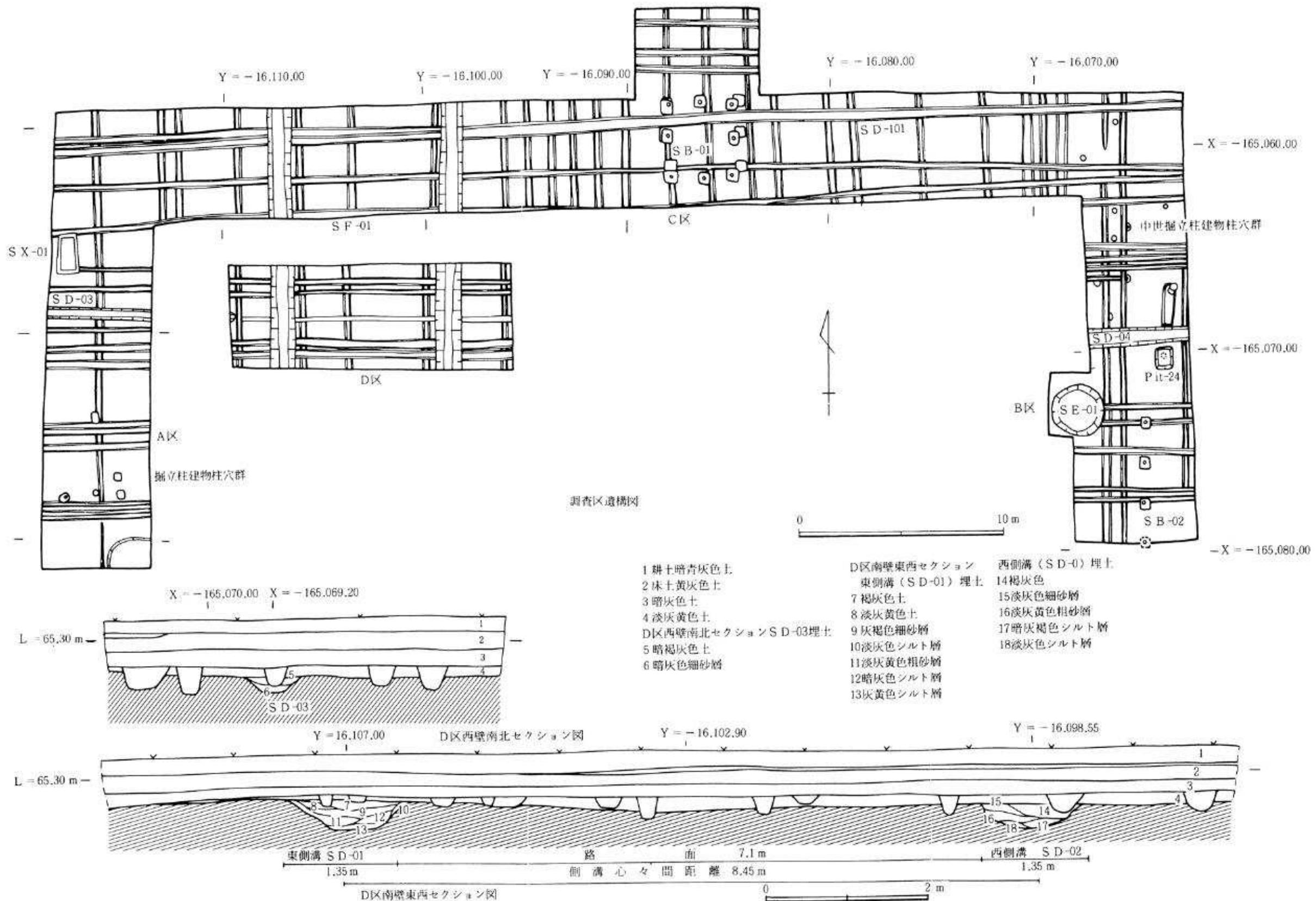
いずれも円形の掘方を有しており、径30～40cmの小規模なものである。柱痕径は、10～15cmである。いずれも遺存度が悪く、10～20cmの深さであり、消滅したものも多いと思われれている。

調査区内では、建物として完結し得なかったが、Bトレンチの北隅一角、あるいは、調査区外の東方に、建物が存在した可能性が高い。

出土遺物は、掘方内から瓦器の細片が少量出土したのみで、詳細な時期は決定し難いが、第4層淡灰黄色土をベースとしており、13世紀代の遺物を出土する素掘り溝によって切られていることがわかる。

調査区内の出土遺物には、藤原京期から中世の遺構までを埋める資料は、出土していない。

藤原京期の宅地利用が廃棄されて以降、少しの間、荒地となり、中世には、調査区北東部を中心に、建物が立ち、宅地として利用され、廃絶後、間もなく耕作地となったことがうかがえる。



第3図 調査区遺構図・断面図・

### 下層の遺構（藤原京期の遺構）

藤原京期に属する遺構は、第4層淡灰黄色土層下、地山面にて検出されている。C区・B区・サブトレンチD区については、遺存度が比較的よく、A区については、削平が激しく消滅した遺構も多いものと思われる。

### 道路状遺構（第3図全体図）

東京極大路である中ツ道より、1坊東に延長した条坊推定ラインが、本調査区の中央を走るため、道路跡が検出される予測もされた。

C区トレンチやや西より、第5層暗褐色土地山面にて、幅1.35mの素掘りの溝2条が、平行して南北に走るのを確認した。

国土座標によって得られた値から、藤原宮内の四条条間小路・東二坊坊間小路の交差点を利用して計算した結果、東京極大路より、東へ1坊分条坊を延長した坊間大路であることが明かとなった。東京極大路を東四坊大路と呼称してよいならば、本調査区検出の道路状遺構（SF-01）は、東五坊大路相当の道路跡であると言える。

路面幅は、7.1mであり、東西両側溝心々間の距離では、8.45mを測る。路面幅では、藤原京内で確認されている三条大路に、匹敵する。

路面上は、ほぼ水平であるが、中世素掘り溝が走り、削平を激しく受けているものと思われる。路面上には、舗装等が行われた整地層は認められず、地山面として検出された。

国土座標による路面心々の測定値は、C区トレンチ北隅、X=-165.60.00の時、Y=-16.102.90である。SF-01は、座標軸に対し、北で約N-1°5'Wの振りを有し、南北に走る。

### 道路状遺構東側溝 SD-01

道路状遺構東側溝である。調査区内を幅1.35mをほぼ保ち南北に走る。深さは、0.3m～0.45mを測る。溝の断面は、逆台形を呈する。素掘りの溝であり、護岸等の附属施設は、認められない。

溝内の埋土は、下層ではシルト層が、中層では、細砂層の堆積である。最上層では、厚さ15cm程度の褐灰色土が堆積している。

溝底の比高差は、0.1mでゆるやかに南方へ傾斜している。SD-01の検出位置は、C区北端、X=-165.060.00の時、SD-01心々の測定値は、Y=-16.098.55である。

### 道路状遺構西側溝 SD-02

SD-01と同様、素掘りの溝であり、護岸等の痕跡は認められない。規模は、SD-01と同様、幅1.35mであり、深さは、0.3m～0.35mとやや浅い。溝断面は、逆半月状を呈している。溝底の比高差は15cmで、ゆるやかに、南方へ傾斜している。

溝内の堆積状況は、SD-01とよく似ており、下層で、シルト層、中層では、細砂層が

堆積している。最上層では、SD-01と同様に、褐灰色土が、0.2m程度堆積しており、SD-01共に、この層からの出土遺物が多い。下層からは、須恵器・土師器の細片が少量出土したにすぎない。最上層は、調査区内が、宅地としては廃絶し、道路状遺構が機能を果さなくなった時期に、側溝を埋めた土層と思われる。

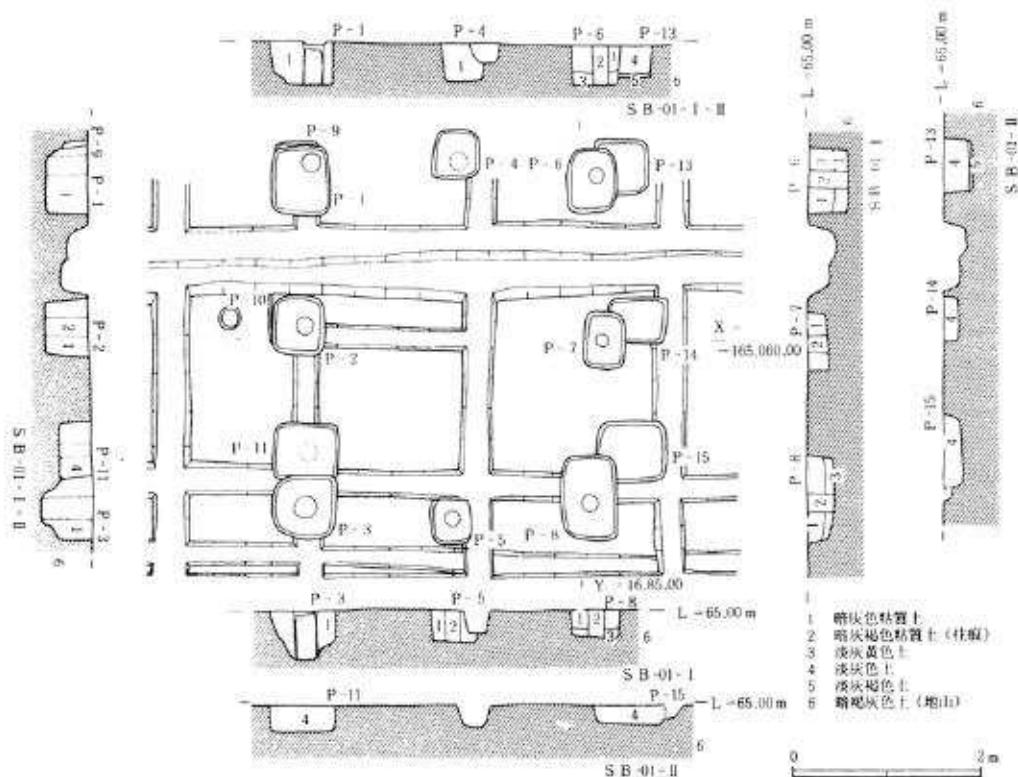
道路状遺構が機能していた時期は、両側溝内の出土遺物から、藤原京期から、奈良時代前半に至るものと思われる。

道路状遺構西側溝の検出位置は、C区北端、X=-165.060.00の時、溝心心の側定値は、Y=-16.107.00である。

#### 掘立柱建物1 (SB-01-I・II)

Cトレーン中央 道路跡の東方に位置する小規模な南北棟の掘立柱建物である。その状況から、SB-01は、建替がなされたものと思われる。

SB-01-Iの柱穴は、一辺0.3~0.9m、深さ0.2~0.5mの方形、あるいは、長方形のプランを有している。桁行2間、梁間2間で、柱穴間距離は、桁行1.8m、梁間1.5mの等間隔である。P-1・3には、柱根が遺存しており、いずれも断面円形で、柱根の径は、0.2mである。SB-01-Iの方位は、座標軸に対し、N-1°-Eの振りを示す。



第4図 SB-01 平・断面図

柱穴からの出土遺物は、ほとんど存在しなかった。

S B-01-Iに切られる、S B-01-IIは、桁行2間、梁間1間の南北棟掘立建物である。柱穴掘方の規模は、一辺0.6m程度、深さ0.2~0.3mである。柱穴間距離は、桁行1.4~1.6mと不等間隔で、梁間は、3.3mある。建物の方位は、座標軸に対し、N-1°-Eと、Iと同様である。柱痕は、建替の際に抜き取られたためか存在しない。建替に際しては、全体的に南へ、0.2~0.3m、東柱穴列を0.4m程度西へずらし、妻柱を付加している。

S B-01の西側柱穴列の存在する地点は、灰色粗砂層をベースとしており、有水が激しく、軟弱である。柱穴掘方も、S B-02のように方形に垂直に掘らず、ある程度、掘方を作った後、柱部分のみ少し深く掘り込んでいる。柱穴埋土も、粘性の強い暗灰色粘質土を固く締めている。

出土遺物は、極少量の須恵器細片が出土したのみであるが、第4層淡灰黄色土下の地山面で検出されたため、藤原京期~奈良時代前半代の掘立柱建物であると思われる。なお、同一時期の柱穴は、C区では、存在しない。

#### 掘立柱建物2(S B-02)

Bトレンチ南隅、S D-03心々より3.4m南で南北に並ぶ3間分の掘立柱建物柱穴列を検出した。掘方は、一辺0.48~0.56mの平面プラン方形で、深さは、0.3~0.35mである。柱痕径は、0.16~0.2mを測り、P-3・4の二基の柱穴には、柱根が遺存している。

柱穴間距離は、2.1mで、柱通りが東西にややばらつき気味である。南北棟の掘立柱建物の可能性があるが、東列の柱穴列は、調査区外で、明らかにすることはできなかった。また、P-4は、南半分が調査区外であり、柱穴列は、3間以上の可能性がある。柱穴列の方位は、座標軸に対し、N-1°5'-Eの振りを有しており、S B-01と同様な方位を示す。

柱穴内の出土遺物は、須恵器・土師器の細片数点のみで、詳細な時期決定を行う資料を欠くが、第4層下の検出であり、道路状遺構・井戸跡・S B-01と同時期と思われる。

また、このBトレンチ調査区内での同時期(同一層位検出)の柱穴は、Pit-24以外は、他に存在しない。

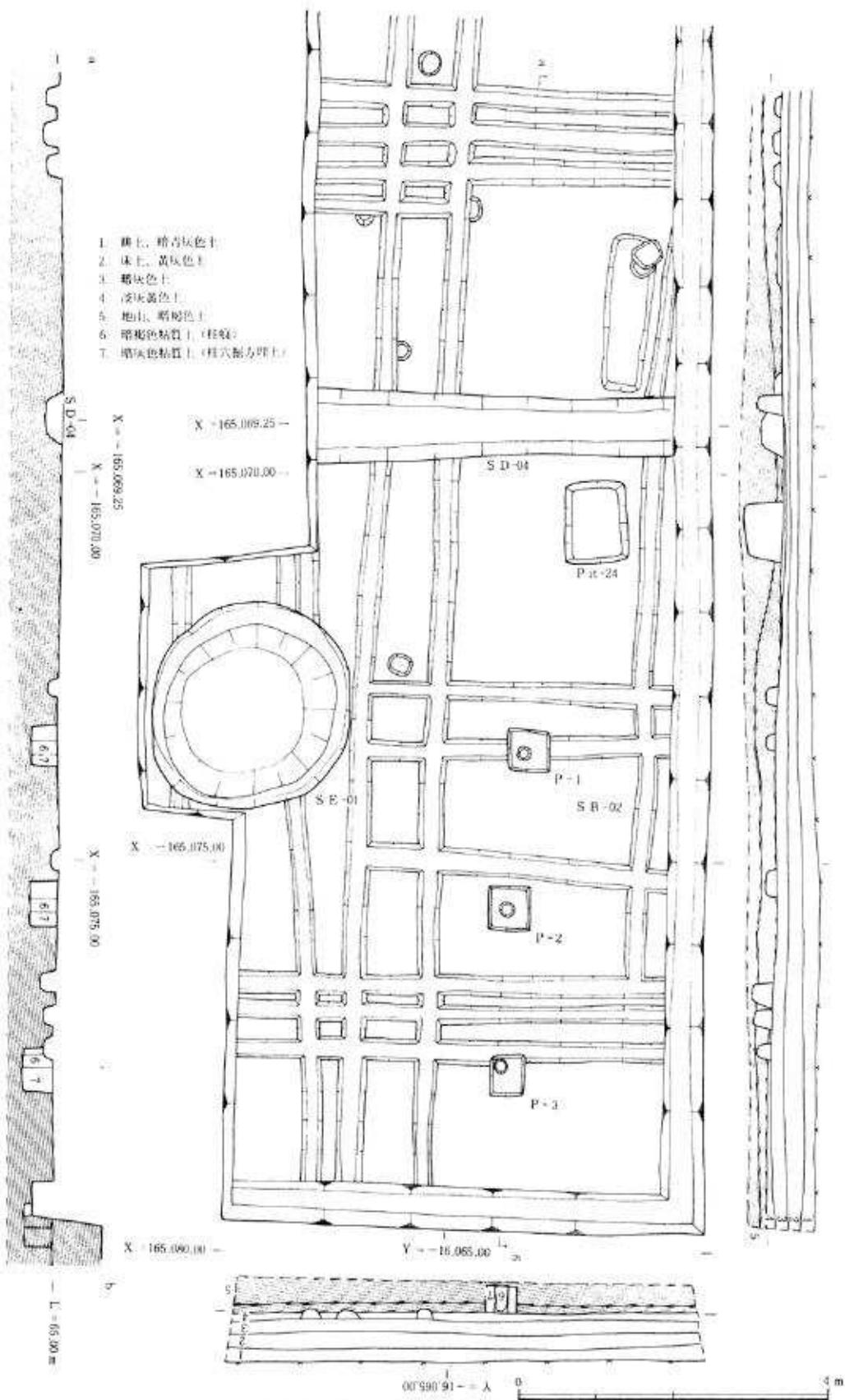
#### Pit-24

S D-03のすぐ南方に検出された。第4層下、第5層地山をベースとしている。

掘方40×68cmの長方形を呈するPitである。断面の観察から柱穴の可能性が考えられる。柱痕と思われる径は、15cmである。

柵列の一部かどうかは、本調査区内では、明らかにできないが、断面にPit-24よりは、若干小規模な同様の落込みが存在する。

出土遺物は、存在しなかったが、第4層下で検出されたため、藤原京期の可能性がある。



第5図 B区 藤原京期の遺構 平・断面図

## 溝状遺構

### SD-03

調査区中央を、東西に走る素掘りの溝である。A区トレント及び、D区サブトレントの西隅で検出された。

溝断面は、逆台形を呈し、溝上面の幅は、0.6m、溝底の幅0.4mであり、深さは、遺存度の良い所で、0.2mを測る。溝内の埋土は、最下層に薄く堆積した砂層があり、上層は、暗褐灰色土が堆積する。（第3図折込）

溝底の比高差は、0.2m程度であり、西から東へ傾斜する。検出位置は、A区東隅、Y=-16.113.00の時、溝心々の値は、X=-165.068.90である。

藤原京期以後、何回か改修されたり、上層の削平を受けるなど、遺存度がわろく、サブトレントでは、全長0.3mを検出したにすぎない。

### SD-04

B区トレント中央を東西に走る素掘りの溝である。護岸等の附属施設は認められない。溝断面は逆台形を呈し、溝上面幅は、0.9m、溝底幅は、0.5m、深さ0.2m～0.25mを測る。溝底は、若干、西へ傾斜している。溝の検出位置は、Y=-16.065.00の時、溝心々の値は、X=-165.065.20である。SD-03と同様に、出土遺物は、ほとんど存在せず、土師器片を少量出土したにすぎない。

SD-04も、後世の改変を受けており、耕作溝等に利用されていた可能性がある。

SD-03・04は、従来は共に、道路状遺構両側溝に取り付いていたものと思われるが、サブトレントD区を設定し、その交点を明かにしようとしたが、削平が激しく検出されなかった。

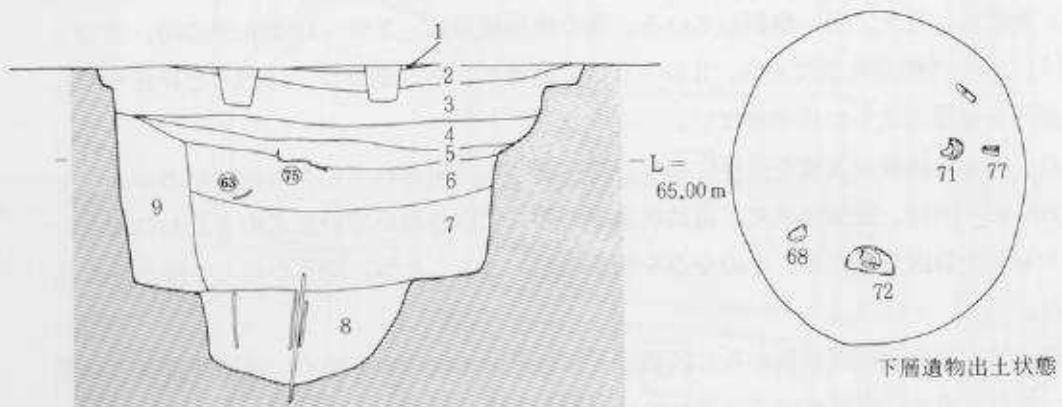
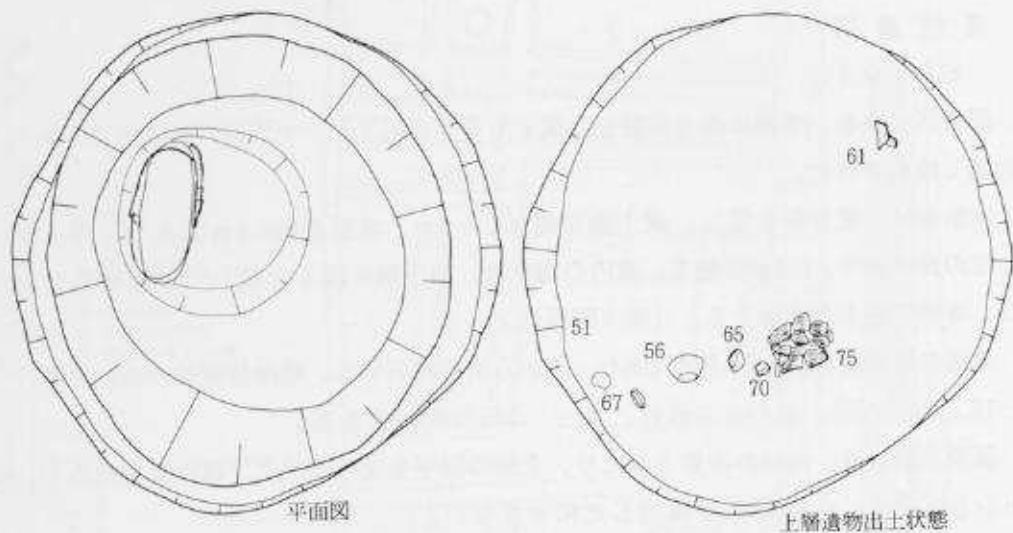
SD-03・04の溝底の傾斜からC区及びA・B区の宅地の水を集め、道路状遺構の両側溝へ、流れ、更に、側溝を南方へ流れていたものと思われる。

### 井戸跡1（SE-01）

B区中央西隅。SB-02の西で検出された井戸底に曲物を設置する井戸跡である。

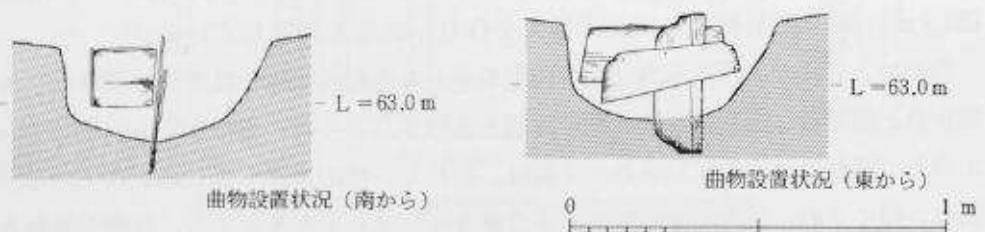
井戸の掘方は、円形で、上部で径2.6mであり、深さ1.7mである。掘方は、2段に掘られており、地表面下、1.2mまで、ほぼ垂直に掘削され、井戸中心より、やや西よりに、径1.1m、深さ0.5m程度の円形の掘方を作り、曲物を設置している。

曲物は、1段のみ認められた。楕円形を呈した曲物の底板をはずし、側板は、井戸底に置かれ、底板は、曲物側板の北側に隙間をあけず立てられ、曲物本位を固定している。立てられた底板は、半分にわられ、1板は、縦にし、地山奥深くさし込まれている。もう1板は、横にされ、掘方両壁面に渡すようにさし込まれている。また、曲物設置掘方内の埋土は、黒灰色粘質土（8層）である。



土層断面図

1. 淡灰黄色粘質土
2. 淡褐色土
3. 暗褐色土（炭化物まじり）
4. 喀斯特岩
5. 淡黄色粘質土
6. 黒灰色粘質土
7. 淡灰色土
8. 淡灰色粘質土
9. 淡褐色粘質土



第6図 井戸跡 (SE-01) 平・断面図

上面から曲物までは、素掘りである。先述のように、本調査区第5層暗褐灰色土、地山層の下層には、暗灰色粗砂層が存在する。この粗砂層は、井戸上面より、0.3m下で、始まり、井戸跡は、この軟弱な土層をベースとして存在する。この暗灰色粗砂層が始まる上面から0.3mの所から曲物設置掘まで、掘方壁面を、淡黒灰色粘質土（9層）で覆い、壁面の崩壊を防いでいる。厚さは、0.35mである。この淡黒灰色粘質土が、遺存しなかった北側の壁面は、調査中に崩壊をくり返した。

堆積状況は、1層～6層まで、ほぼ一気に埋められたと思われる。この上層出土の遺物は、完形か、または、完形に近い状態で出土しており、井戸廃棄時による祭祀の可能性がある。下層（7層）出土の遺物は、破片が多い。また、種子等の植物遺体も出土している。

### 遺物の観察

#### ○ SX-01 (第7図)

出土遺物の内訳は、染付磁器（1～11）・陶器（12～14）・鉄製品（15）がある。

##### 染付磁器

全般的に、素地は、乳白色であり、釉調は透明感がある。呉須は、濃青色に発色しており、コバルト釉を思わせる。絵付は、8の内底見込の文様以外は、すべて筆書きである。

##### 碗（1～9）

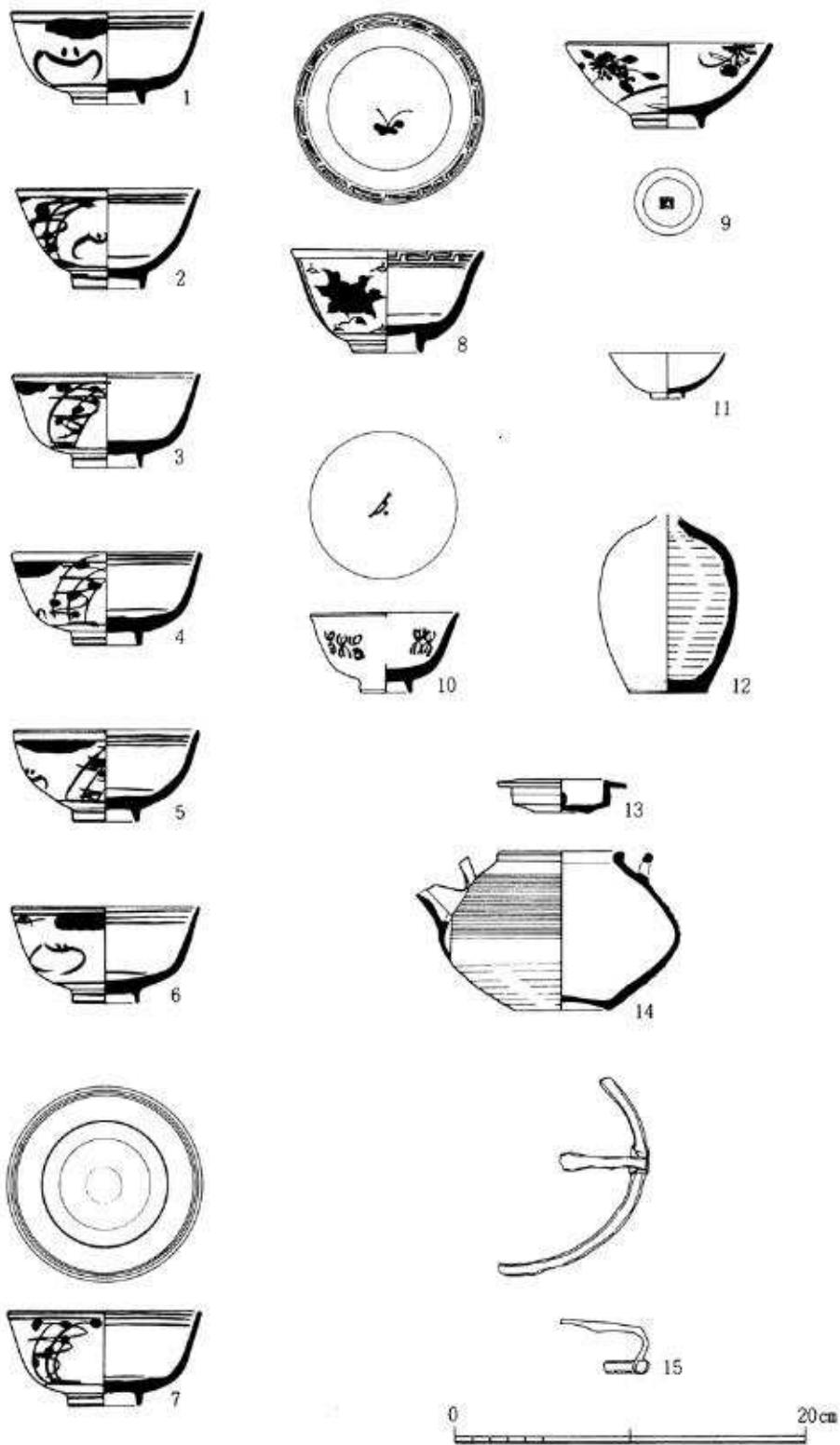
碗は、小さな高台径（高台径1.8～2cm）に比して、大きな口径（口径5.2～5.6cm）を有する。形態は、腰部が張り、体部は斜方向に直線的に立ち上がる（1～7）と、あまり腰部が張らず、内湾気味に立ちあがり、口縁部で外反する（8）。そして、高台部から、やや内湾気味に斜方向に広がる（9）がある。

1～7は、7個体1セットになるもので、文様・調整・焼成技法が共通する。文様は、外面に、高台及び腰部・口縁部に圈線一条づつ巡らせ、腰部の圈線から、草文等の文様を器面に3回転させている。内面は、口縁部に3条、内底に1条の圈線を巡らせている。高台裏の銘等は持たない。

内面見込みには、蛇ノ目状の釉のかき取りが見られ、重焼痕を有する。また、高台疊付には、離れ砂が付着しており、これらが、砂目積みによって焼成されたことがわかる。これらは、いわゆる“くらわんか茶碗”と呼ばれるものに類似する。

8は、外面口縁部・腰部及び、高台脇部に一条の圈線を有する。器面を2条の直線によって4等分し、その中央に花文を配している。

内面は、口縁部に雷文帯を巡らせ、その上部に1条、下部に2条の圈線を巡らせ囲む。見込みには、1条圈線を巡らせ、その内側に、印判によるものと思われる蝶の文様を配する。見込みの釉のかき取りは見られない。高台疊付には、離れ砂が付着する。



第7図 SX-01 出土遺物実測図

9は、外面口縁端部、高台脇部及び、体部高台部境に、各一条づつ圈線が巡る。器面全面に配された花文、草文は、高台部と体部境の圈線より始まる。内面は、口縁端部の圈線より始まる花文をワンポイントに配する。

見込みに釉のかき取りは見られず、高台疊付けには離れ砂が付着する。

10は、染色体のような文様を外面に配し、内面に、銘と思われるものが筆書きされている。口縁端部には、褐色釉の圈線が巡ぐる。

形態は、ハの字状にふん張る高台部を有し腰部が張り、口縁部でやや外反する小型の碗である。

11は盃である。小さく低いハの字状にふん張る高台と、内湾気味に大きく開く体部からなる。高台疊付を除く全面施釉である。

外面高台と体部の境に2条、口縁部に1条の圈線がめぐり、内面口縁部及び、端部に計2条の圈線がめぐる。口縁端部の圈線は、褐色釉が使用されている。

#### 陶器（12～14）

12は、徳利である。口縁部は、欠損する。

平らな底部から内湾気味に立ち上がり、肩部は、やや張り気味で、小さな口頭部へと続く。外面底部はヘラケズリ、体部はロクロナデである。外面体部には、つけかけによって、褐色釉が比較的厚く施釉されている。外面底部は、露胎を呈する。

13・14は急須である。13は蓋であり、落し込んで蓋をするものである。中央には、粘土板を折り曲げた小さな把手がある。調整は、外面口クロナデ、内面ヘラケズリを行う。

そろばん状の体部を有する14は、底部を上げ底状にする。小さな注口部を付け、体部上半部の前後に、型づくりによって形成された耳を2箇ついている。体部から注口部に通じる孔は1個である。体部上半部には、沈線が巡る。施釉は、外面体部中位から、上半部に、透明感のある灰緑色釉が施されている。釉には、細かい慣入を生じている。下位には、褐色釉が、ハケ塗りによって施釉され、内面にも施釉されている。口縁端部には、釉のかき取りが見られる。

15は、鉄製の三徳か、五徳かと思われる。楕円形を呈するが、%を欠損する。角材を楕円状にまげて形成した基部に、鉄板を巻きつけて作られている。

これらの遺物中の碗類を機能的に見れば、1～7及び8は、汁茶碗であり、9は、飯茶碗である。10は、湯のみ茶碗である。つまり、1個体の飯茶碗に、8個体の汁茶碗、徳利と盃、急須と湯のみ茶碗、急須を置く三徳か、五徳があり、各セット関係が見られる。

また、土壤内には、木材片と共に、箸かと思われる両面を四角に削り、細く仕上げられた、木片が出土している。上層では、羽釜かはうらくの破片が出土しているが、本遺構に直接関係のある遺物ではないかもしれない。

遺物の内訳は、1セットのみであり、各セット関係が重複することはない。つまり、1人分の食生活に有する器材が備わっている。

また、遺構の項で説明したが、磁器碗・盃類にのみ、赤色顔料が付着している。図11の盃や、10の湯のみ茶碗、8、4、7の碗では、特に厚く、赤色顔料が付着している。これらは、赤色顔料を塗ったと言うよりも、盛ったように思われる。また、器面外面には、全く付着していない。

この赤色顔料は、徳利や急須、鉄製品には全く、付着していないことから、供膳器のみに、意図的に施したものであろう。

#### 中世素掘溝及び、包含層出土の遺物

第8図16～20は、第2遺構面の素掘溝出土の遺物である。

16～18は、瓦器で、断面三角形の小さな貼付け高台を持つ新しいタイプのものである。16は、小型のもので、口径7cmで、体部は半球形に近い形態を呈する。いずれも、13世紀後半を前後するものであろう。

19は、土師器杯Aである。摩滅が激しく調整は不明である。口縁部は、つまみ上げられ丸く納まる。奈良時代前半代のものであろう。20は、須恵器鉢と思われる。内面～体部中位は、ナデ調整。外面下位を、回転ヘラケズリによって調整されている。口縁端部は、上方につまみ上げられ丸く納まる。

21・32は、第3層淡灰色土出土の遺物である。この他に、瓦器細片も出土している。

21は、口径9cm、器高1.4cmの土師器小皿である。内面及び、外面口縁部は、ヨコナデ、外面底部は、成形時の指頭痕を残す。

32は、白色の発泡がやや激しい流紋岩を用いた、外彎刃三日月状の石包丁である。刃縁部は、両面から研磨され鋭く仕上げられる。周縁部も研摩加工がなされ、加工時の痕跡が肋状に残る。双孔は、敲打凹痕をつけず、研磨後、錐によって穿孔されている。双孔の稜線の一部が磨滅する。

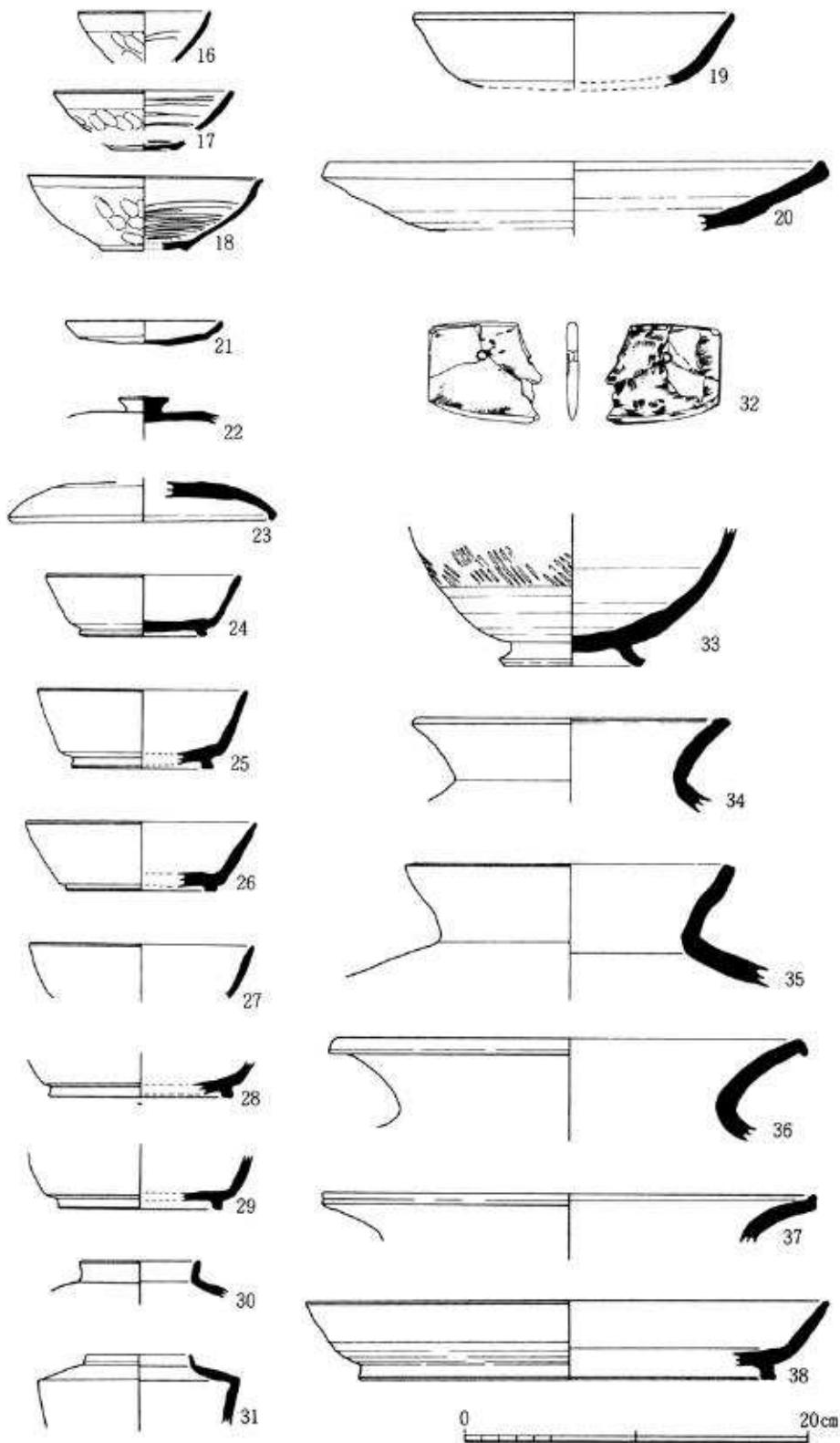
端部は、直角に近く仕上げられているが、他の周縁部より、研磨加工が粗雑であり、表面にも、薄離痕があるため、欠損し補修した可能性がある。

第3層からの出土であり、他に、弥生時代前期の遺物は見られない。

22～31、33～38は、第4層淡灰黄色土出土のもので、いずれも、藤原京期～奈良時代前期にかけての遺物であると思われる。

22・23は、杯B蓋である。22は、扁平化した宝朱のつまみを持つ。

24～29は、口径12～13cm、器高3.6～4.2cm、高台径7.6～9.8cm前後の杯Bである。内、外面体部は、ロクロナデで、外面底部は、ヘラキリの後、ロクロナデによって消れる。高台は貼付けで、ハの字状に外方にふんばる。



第8図 中世素掘溝及び遺物包含層遺物実測図

38は、口径30.6cm、器高5cm、高台径24.6cmの大型の杯である。外面底部から中位にかけてヘラケズリ調整を行い、他は、ロクロナデ調整である。高台は、貼付け高台で、端面に、凹面を有する。

33は、ハの字状に外方に広がる貼付高台を有する壺体部片である。体部は、球形を呈する。調整は、外面体部中位～底部にかけて、回転ヘラケズリで、上位は、斜方向のタタキによる調整である。内面は、ヨコナデである。

34～36は、甕口縁部片である。34の口縁端部は、内側に肥厚し、35は、平坦面を持つ。36のものは、外方につまみだし、下方に折られている。調整は、いずれもロクロナデ調整である。

37は、長胴の土師器甕口縁片と思われる。口縁端部は、上方に突出し、丸く仕上げられている。ヨコナデによって成形されている。

#### 道路状遺構（SF-01）側溝出土土器

側溝の出土遺物は、細片が多く、図示し得たのは、以下の12点である。

土師器（39～43）

皿C 39

平らな底部と強いヨコナデによって大きく外反する口縁部からなる小型の皿である。内面には、漆が付着しており、調整は不明である。外面底部は、形成時の指頭痕を残す。

杯C 40

やや外反気味の口縁部を持ち、端部はわずかに内傾する面を有する。底部は丸味を持つ。外面口縁部から内面にかけてヨコナデで調整しているようであるが磨減が激しい。

杯A（42・43）

いずれも、外面底部をヘラケズリ調整によって平らに仕上げられている。底部以外の調整は磨減が激しく不明である。42の体部は、直線的に斜方向に広がり、口縁端部は、つまみ上げられ、上方にのびる。43の口縁部は、内側に肥厚し、丸く納まる。

須恵器（44～50）

杯蓋B（44・45）

端部は、短かく垂直気味に下方に折れる。内面の稜は、明瞭でない。44は、天井部までロクロナデし、ヘラケズリ調整は認められない。45は、天井部を回転ヘラケズリし、他はロクロナデ調整。いずれもつまみを欠損する。

杯B（46・47）

法量は、共に口径18cm、器高4cm、高台径13.2cmである。体部は、斜方向に広がり、小さく低い高台を持つ。調整は、内外面ロクロナデ。外底は、ヘラキリののちロクロナデによって消されている。

48は、手づくねで形成され、外面はナデによって指頭痕を消す。短頸壺に形態が類似するミニチュア製品である。

#### 長頸壺（49・50）

49は、頸部片で、口縁部近くで、ラッパ状に開く。口縁端部・体部を欠損する。調整は、内外面、ロクロナデ。外面及び、内面口縁部に濃緑色の自然釉がかかる。

50は、体部中位以上を欠損する長頸壺片である。体部は、内湾気味に立ち上がり、中位付近で鋭く内側に屈曲し、明瞭な稜がつく。高台は、ハの字状に張り出す高台が付けられ後に、ロクロナデによって丁寧に仕上げられる。高台端部は、下方につまみ出されている。体部外面下位は、3回転の回転ヘラケズリを行い、他は、ロクロナデ調整である。外面体部には、自然釉がかかる。

側溝は、その堆積状況から、上層・下層に分けられるが、下層出土のものは、39・40で、他は、上層の、褐灰色土の出土である。これらの他に、種子や木片の植物遺体も、下層から出土している。（図版-16）

#### 井戸跡（SE-01）出土遺物

井戸跡出土遺物は、下層の各層出土の遺物は、破片が多数を占めるが、上層での出土遺物は、完形及び、完形に近い。

#### 須恵器

##### 杯A（51・52）

51は、丸く内湾気味の体部を持ち、口縁部も、さらに内湾し、端部は丸く納まる。体部は、ロクロナデ調整を行い、外底は、ヘラキリの後、荒くナデ消す。やや軟質。口径10.5cm 器高3.8cm。

14は、斜方向に直線的に立ち上がる体部と平坦な底部からなる。内・外面ロクロナデ調整、外底は、ヘラキリの後、ロクロナデによって丁寧に消されている。口径13cm、器高7.8cm、底径8.8cm。

##### 短頸壺（53・56・57）

肩部が、鋭く張り、明瞭な稜を持つ53・56と、肩部があまり張らず、丸味を持つ57がある。53・56の頸部は、直立気味であるが、57は、強いヨコナデによって、やや内傾する。また、56の口頸部、境と、肩部に、各一条の沈線を有する。

53は、ロクロナデ調整、肩部以下を欠損する。口径9cm。56は、内面及び、外面体部下半までを、ロクロナデし、以下、回転ヘラケズリによって調整される。口径9.2cm、器高16.2cm、底径9cm。57は、内面から、外面体部中位までを、ロクロナデし、体部下位、及び、底部は、縦方向の静止ヘラケズリを行う。口径9.2cm、器高17cm（復元）、底径8cm。

##### 壺底部片（54）

底径21.4cmの壺底部片である。調整は、内面ナデ、外面体部は、回転ヘラケズリ、外底は、不定方向のヘラケズリを行う。

#### 壺口頸部片 (55)

口縁端部が、下方へ折り返された形態を有する壺口頸部片である。調整は、内面口頸部及び、外面体部までを、ヨコナデし、内面体部には、同心円タタキを残す。口径21cm。

#### 杯B蓋 (58)

扁平な天井部を有する杯B蓋である。天井部上位を欠損する。端部は、垂直気味に下方に折り曲げられる。内面から、外面天井部中位まで、ロクロナデし、天井部上位は、回転ヘラケズリ調整を行う。口径19cm。

#### 杯B (59~61)

59は、底部のみの破片である。高台径10cm。60は、腰部が折曲し、張り、明瞭な稜を持つ。高台は、断面方形で、外方にハの字状にふん張る。調整は、内、外面ロクロナデ。高台径12.8cm。61は、体部と、底部境に存在する、断面台形の小さな貼付高台から、斜方向にやや内湾気味に立ち上がる体部。口縁部では、直線的に立ち上がり、端部は、丸く納まる。外面底部から体部下位までを、回転ヘラケズリし、他は、ロクロナデによる調整を行う。口径16.4cm、器高7.3cm、高台径10.8cm

#### 土師器

#### 皿C (62~65)

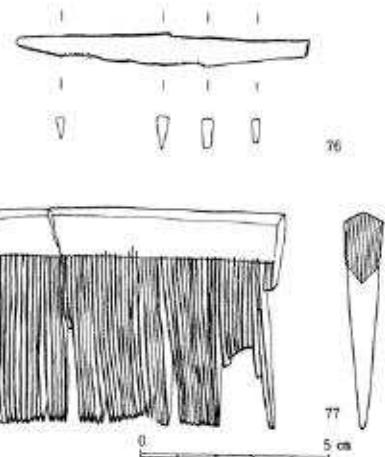
65のように、強いヨコナデによって口縁部が大きく外反するものと、器高が低く、口縁部が、斜方向に短かく広がる62~64があり、ほとんど外反しない。調整は、共に、内面及び、外面口縁部をヨコナデし、外底には、形成時の指頭痕を残す。ヘラミガキは、認められない。法量は、口径5.4~6cm、器高1.6~2.7cm

#### 皿A (69)

平らな底部と、内湾気味に立ち上がる口縁部からなる。外面は、ナデ調整し、内面には放射線状の暗文を施す。口径14cm。

#### 杯A (66~68)

口縁上半部が、大きく外反する66と、垂直気味に立ち上がり、口縁上半部でやや外反する67・68がある。66は、外底部ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキ。内面口縁部は、ヨコナデ。底部は、放斜線状の暗文を施す。口径11.6cm、器高2.6cm。67は、口縁部外面は、横方向の



第9図 井戸跡 (SE-01) 出土  
金属製品及び木製品実測図

ヘラミガキ内面は、口縁部で、2段の斜行暗文、内底は、左回りラセン暗文を施すが摩滅が激しい。

#### 壺A (70)

口縁部は、強いナデによって大きく外反し体部は球形に近い小型の壺である。調整は、ナデのみで粗製品である。口径7cm、器高5cm。

#### 甕A (71・73)

球形の体部を有する甕で、71は、小型である。外面体部は、縦ハケ、内面は、形成時の指頭痕を残す。

#### 甕B (74・75)

大きく外反し、短く開く口頸部と、胴長の体部を有する甕である。口縁端部は、上方に突出する。外面体部は、縦ハケ、内、外面口縁部ヨコナデ、内面頸部～体部上位まで、横ハケ、以下は、形成時の指頭痕を残す。

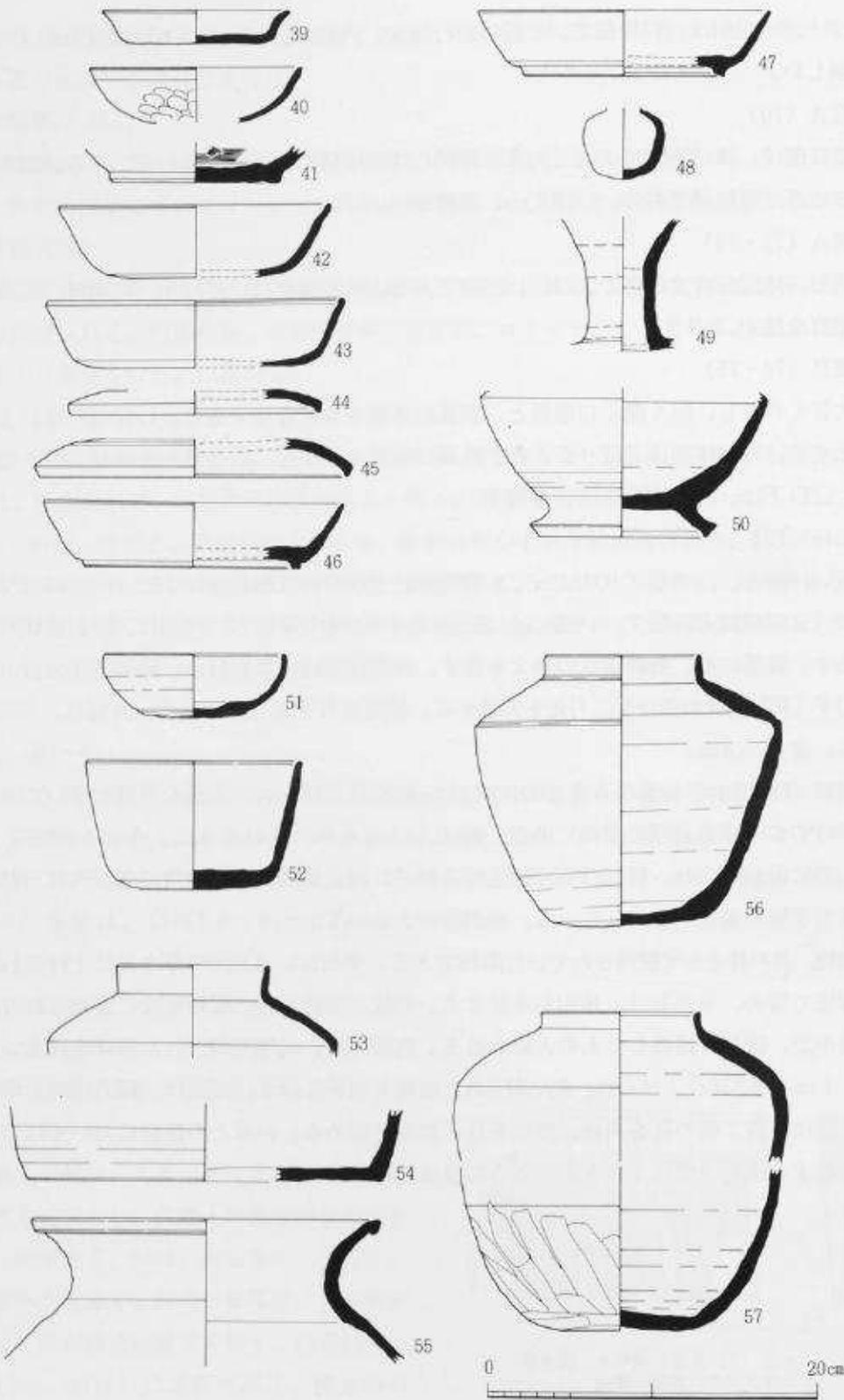
#### 高杯 (72)

浅い杯部と、ヘラケズリによって8角形に仕上げられた脚部からなる。杯内面には、口縁部で、2段の斜方向暗文、内底には、左回りのラセン暗文を施し、外面は、放斜線状の暗文を施す。脚部にも、放斜線状の暗文を施す。杯部径27cm、器高11cm、脚部径16cm。

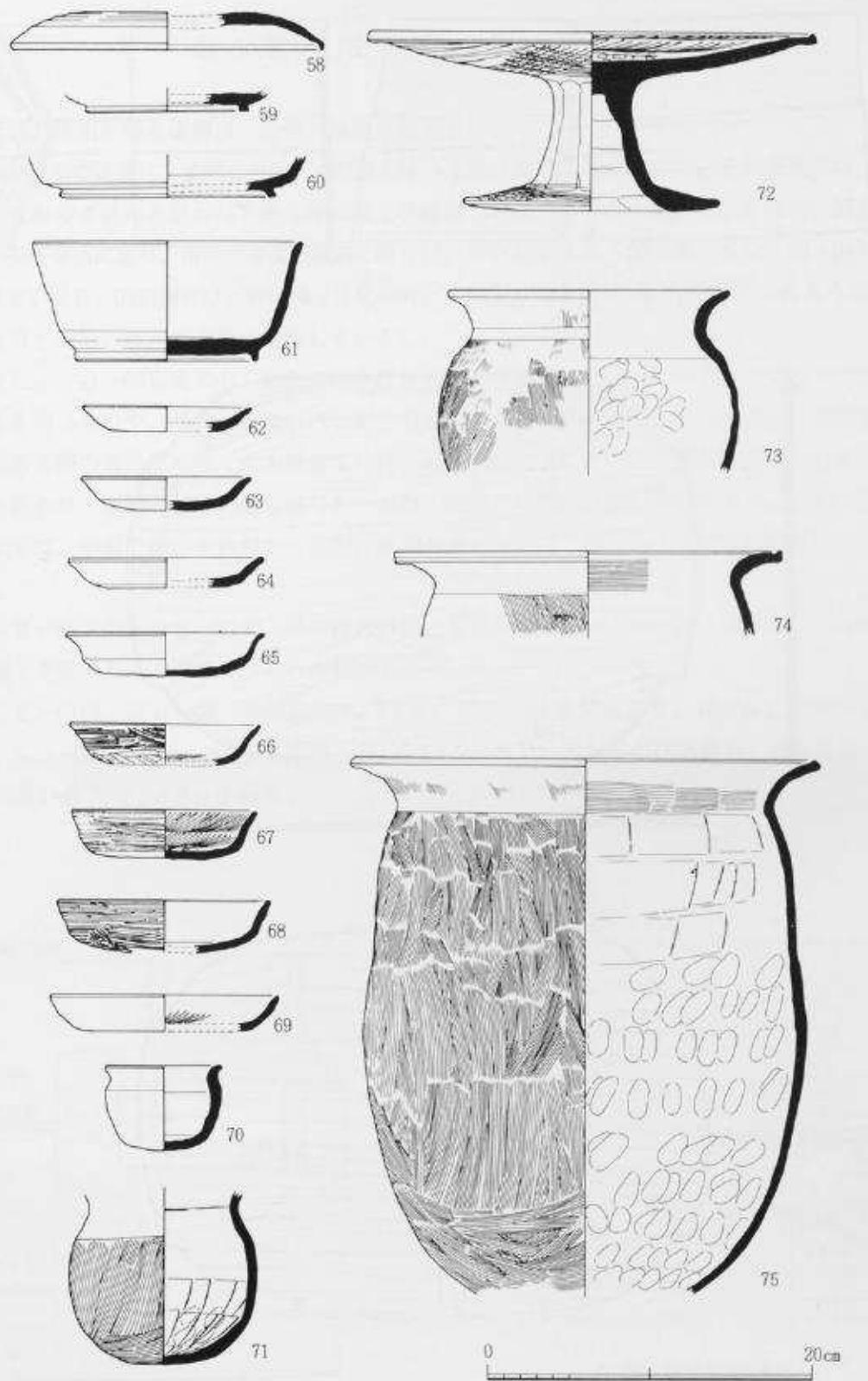
刀子 (76) 鎌化が進行し、刀先を欠損する。棟関を有する刀子である。身幅は、9mmである。全長15.4cm。

横櫛 (77) 歯は、両面から交互に引き出し、細く仕上げられ、表面を平滑に研いており、端部はやや丸味をおびる横櫛である。歯は、4.5cmあり、棟の厚さは、1cmを測る。頂部は山形に面が取られ、肩は、丸く仕上げられる。棟上縁部には、線状の傷が入れられ、そこまで丁寧に歯を引き出している。歯の幅は、2～9mm。

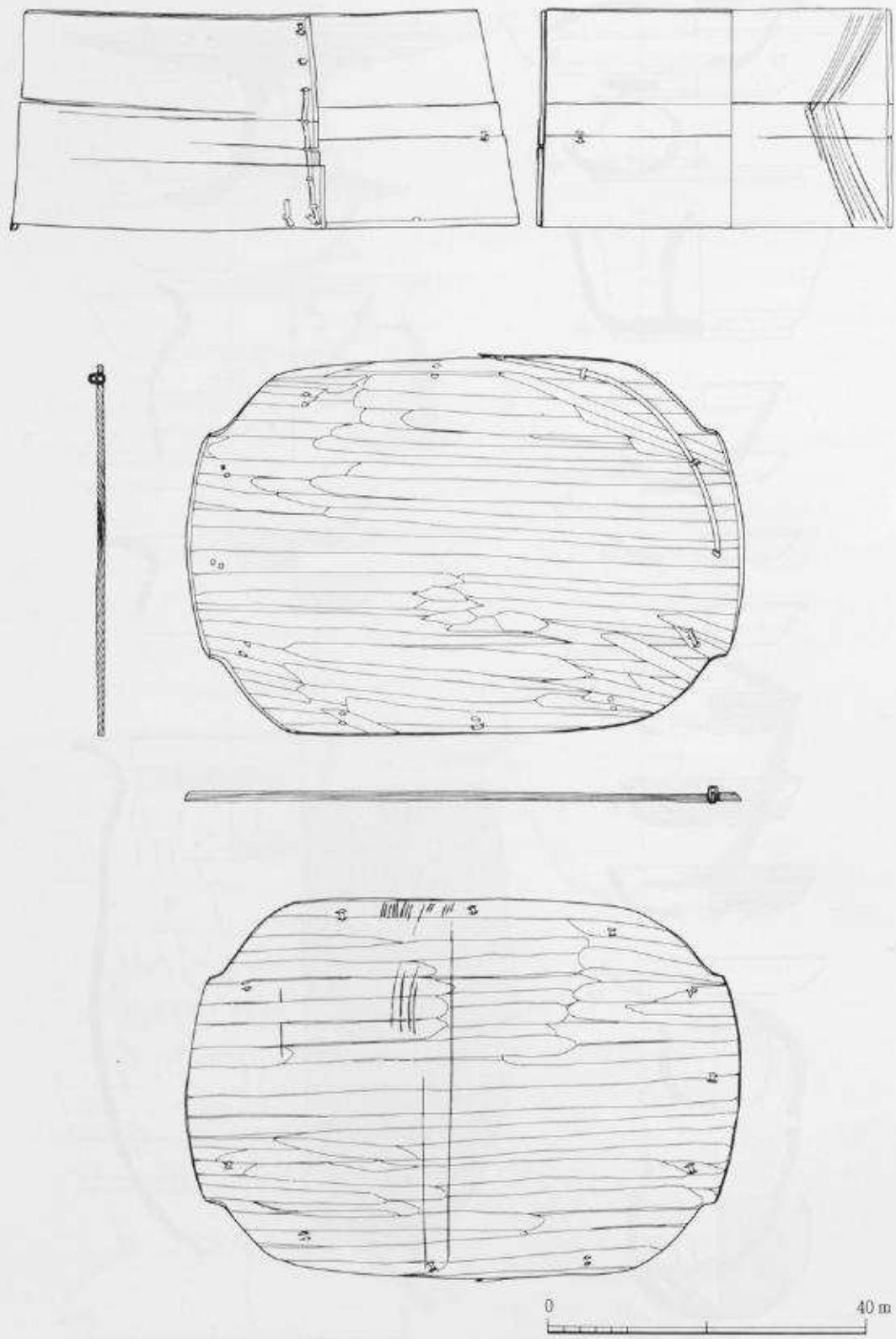
曲物。井戸杵として使用されていた曲物である。側板は、4mmの厚さに仕上げられ、桜の樹皮で留め、平面形は、楕円形を呈する。側板の中位にも、桜の樹皮で留めており、製作途中で、破れ、補修したものと思われる。内面には、鉋等で削られた痕跡を残す。底板は、1cmの厚さに仕上げられ、鉋で削られた痕跡を明瞭に残す。側面は、斜方に面を取つ。12ヶ所に、各2個の孔をあけ、側板を桜の樹皮で留める。側板との接合においては、側板が接着する所を一段低くかき取るような技法は認められない。



第10図 道路状遺構側溝 (SD-01・02) 及び井戸跡 (SE-01) 出土遺物実測図  
39~50 道路状遺構側溝出土・51~57井戸跡出土



第11図 井戸跡出土遺物 実測図



## 第4章 まとめ

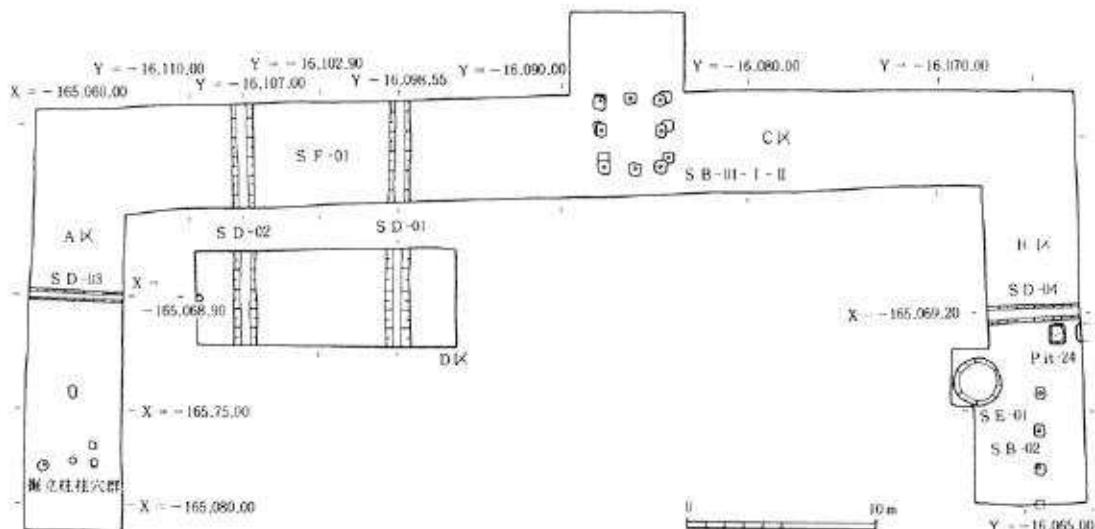
今回、検出し得た遺構は、近世～藤原京期に至る。

藤原京期の遺構は、素掘りの東西両側溝を持つ道路状遺構（S F -01）、その東側には、建替えがなされたと思われる南北棟の掘立柱建物（S B -01）が1棟ある。さらに、調査区中央を東西に走り、道路状遺構両側溝に取り付いていたであろう溝2条（S D -03・04）がある。S D -04以南には、井戸跡（S E -01）1基と、南北棟の掘立柱建物であろうか（S B -02）、柱穴列1条を検出している。

また、S D -03以南にも、数基の掘立柱柱穴が存在する。柱穴は、一辺30～50cmの方形掘方を持つものや、径30cm前後の円形掘方のものもある（図版10）。この地区は、遺物包含層第4層の遺存度も悪く、中世あるいは、近世の耕作等によって、激しく削平されたものと思われ、建物として完結し得なかったが、数棟の建物の存在がうかがえる。S D -03以北では、平面で検出されなかつたが、南北セクションに、柱穴らしきPitを確認している。

S B -01・02、S E -01や、他の柱穴群は、S F -01及び、S D -03・04から、一定の距離・空間をもって存在することがわかる。

S B -01は、S D -03・04から北へ、6.9m、S F -01東側溝より、10.5m。S B -02は、S D -04から南へ、4.2mの距離を有している。S D -03以南の柱穴群で、最もS D -03に近い柱穴で、4.8mを測る。



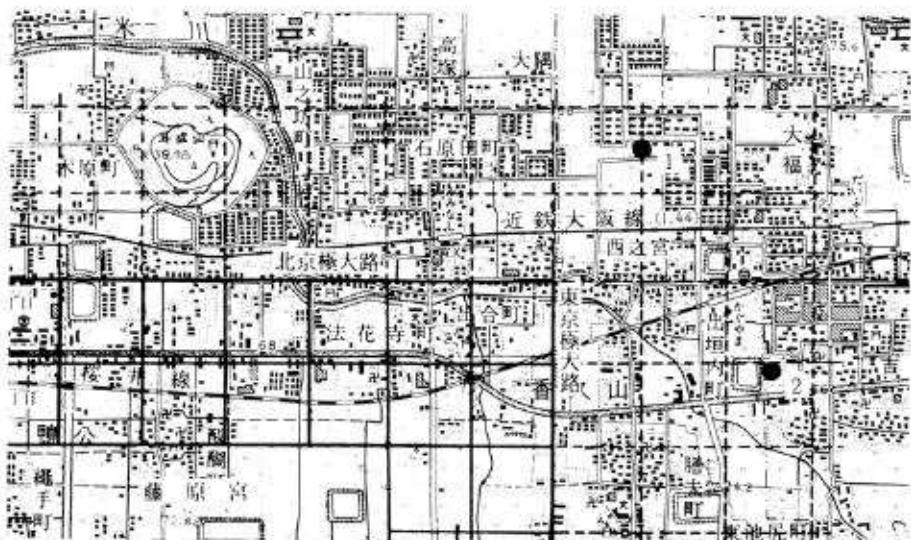
第13図 藤原京期の遺構

道路状遺構が、宅地を区画することは、言うまでもないが、本調査区検出の、S F -01 両側溝に取り付いていたであろう S D -03・04は、宅地あるいは、建物を区画する溝の可能性がある。宅地や建物を、溝や柵で区画する例はあるが、藤原京域外での遺構の検出例が少ないため、本調査区例も、区画溝としては促断できない。今後、藤原京域外の宅地が、どのくらいの面積を占有し、区画されていたのか、調査の進展が待たれる。

今回検出の、道路状遺構は、東京極大路から1坊分東を南北に走る坊間大路であることが明らかとなった。桜井市内の、藤原京域外の道路状遺構の検出例は、吉備大角遺跡（第14図2）がある。東西に走る路面幅7.1mを有する道路状遺構は、藤原京の一条大路を東へ2.5坊分も延長した、条間大路と思われるが、推定ラインをややすれて検出されている。道路状遺構を狭んで、南北には建物跡が数棟検出されている。

また、道路跡は、検出されなかつたが、吉備遺跡岡崎地区や、大福遺跡でも、藤原京期から奈良時代の建物跡が検出されるなど、藤原京域外での同期の遺構の検出が増加しつつある。

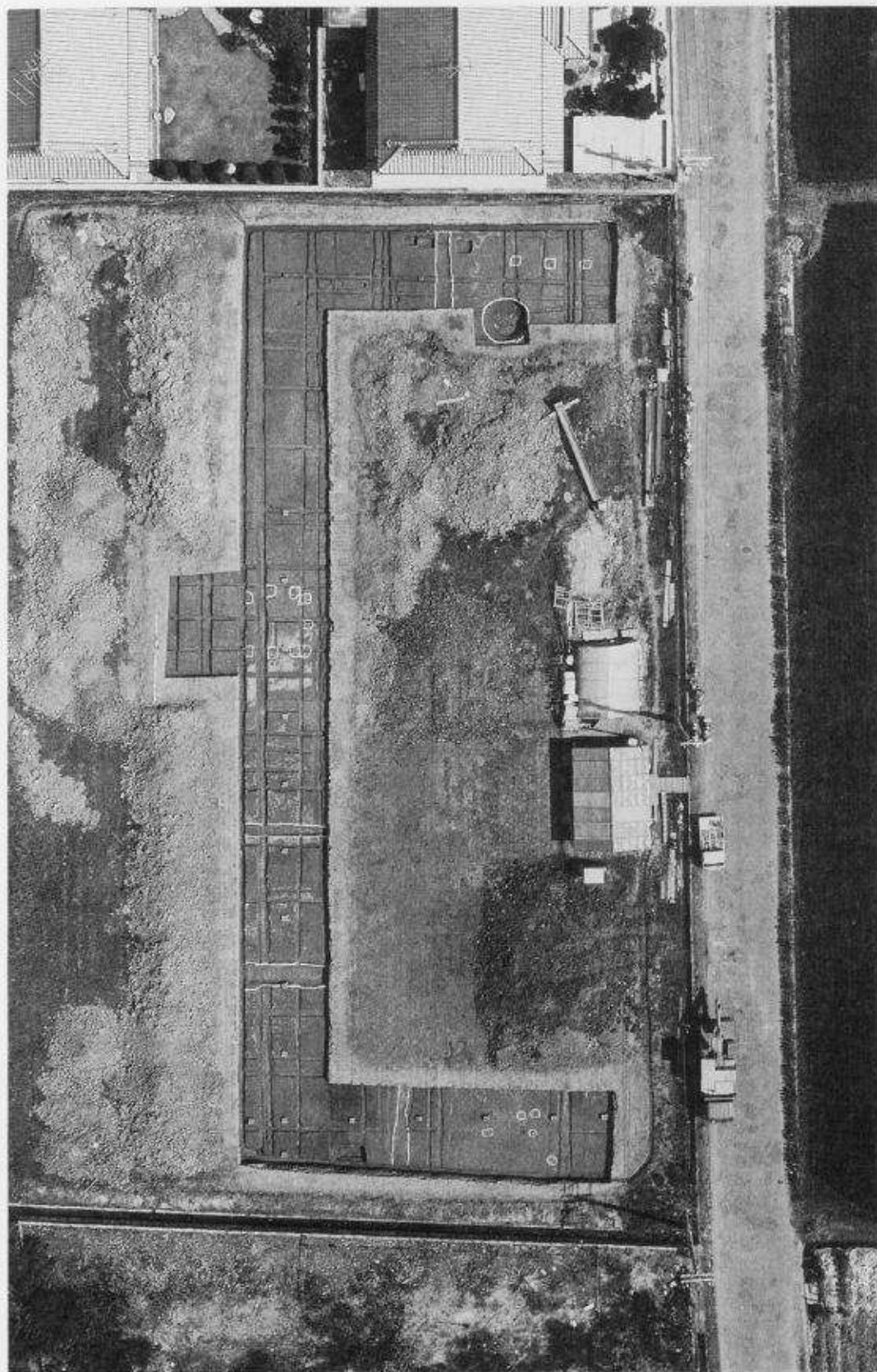
このように、藤原京域外にも、条坊が延長されていたことが、明らかになりつつある。今後、桜井市内（藤原京北東部）で、どのくらいの範囲をもって、どのように、藤原京の条坊が延長されていたのか。また、区画内の宅地利用の状況等を明らかにするため、吉備大角遺跡・本調査区をはじめ、桜井市域の藤原京期の遺構をふくめ、今後の調査の進展とともに検討されなければならない。



第14図 藤原京域外北東部検出の道路状遺構

- 1 大福遺跡・西之宮黒田地区
- 2 吉備大角遺跡

図版1 調査区全景  
航空写真



図版2 上層の遺構1.  
SX-101



堆積状況（南から）

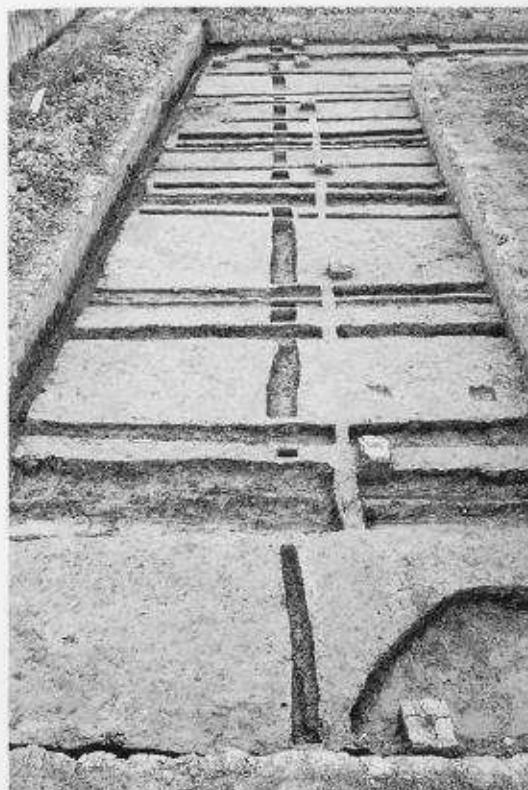


遺物出土状況（西から）

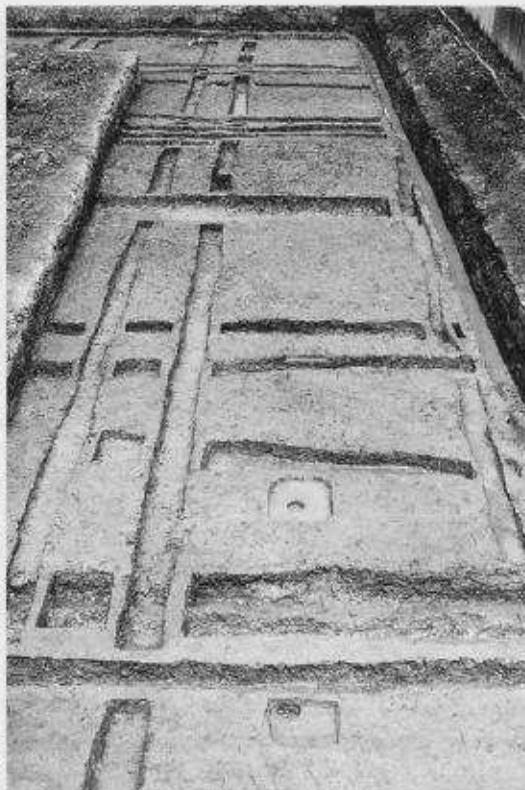


完掘状態

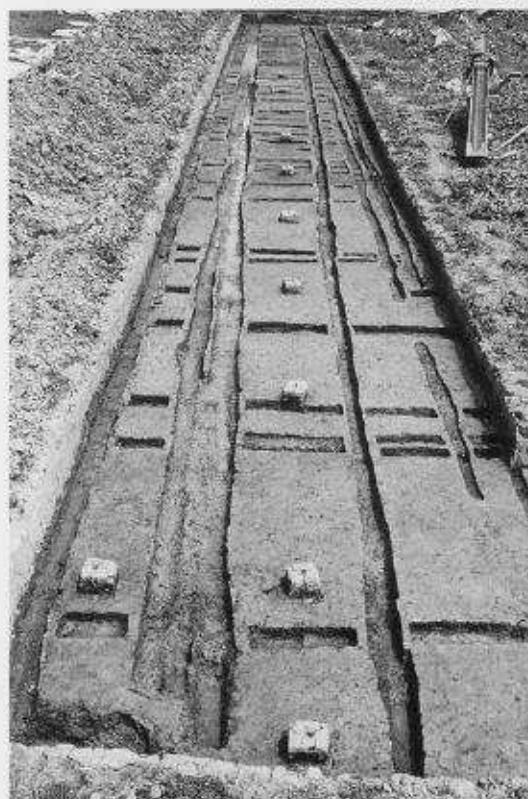
図版3 上層の遺構2. 中世素掘溝・中世掘立柱柱穴群



A区中世素掘溝（南から）



B区中世素掘溝（南から）

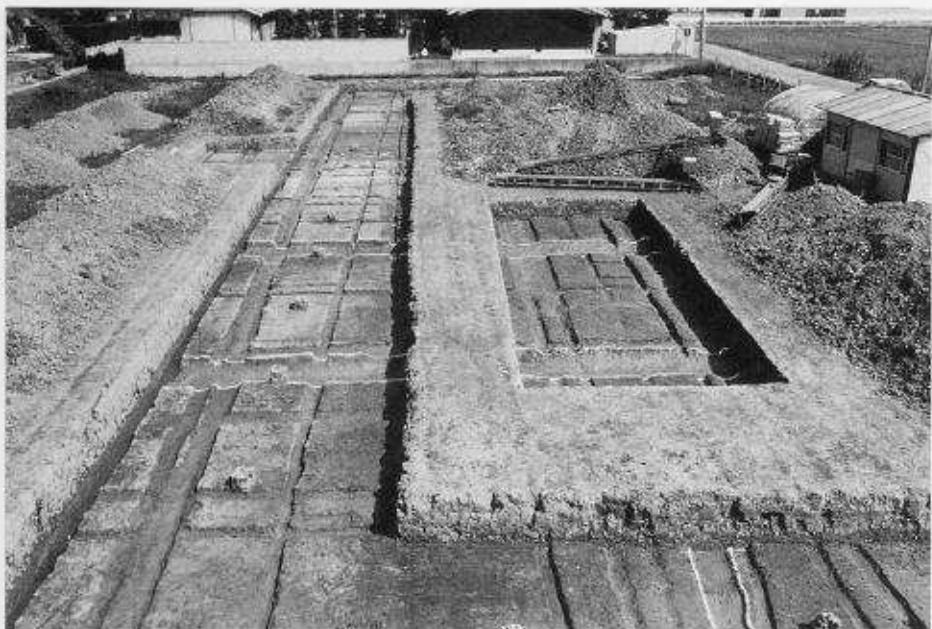


C区中世素掘溝（西から）



B区中世掘立柱柱穴群（西から）

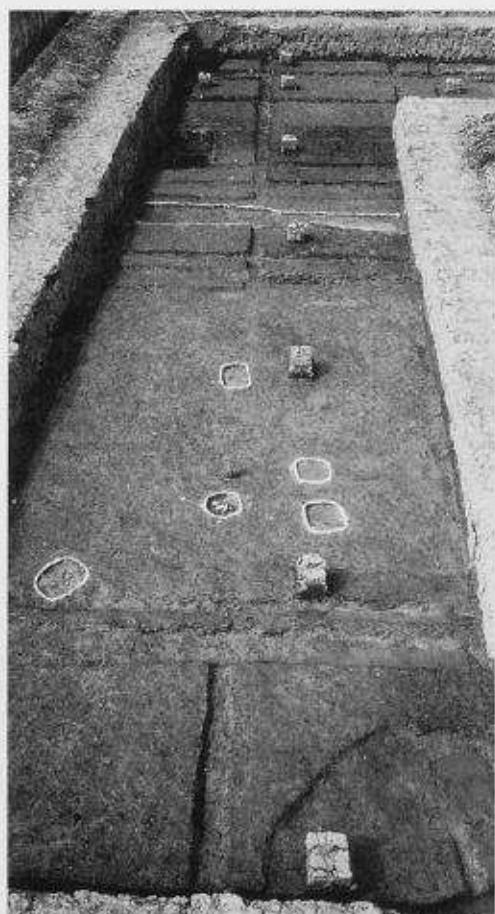
図版 4  
藤原京期の遺構



CD区・D区 道路状遺構・SD-03(手前)



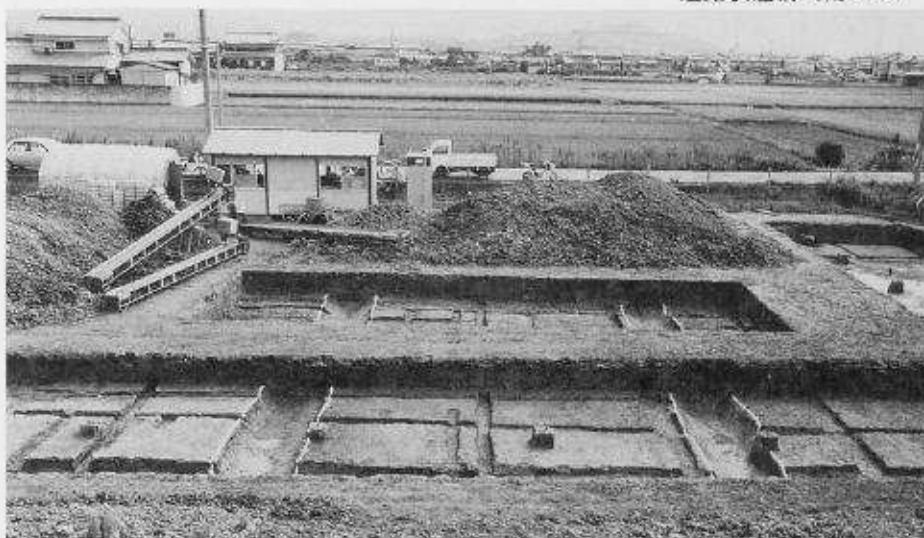
B区 SD-04・Pit-24・SE-01・SB-02



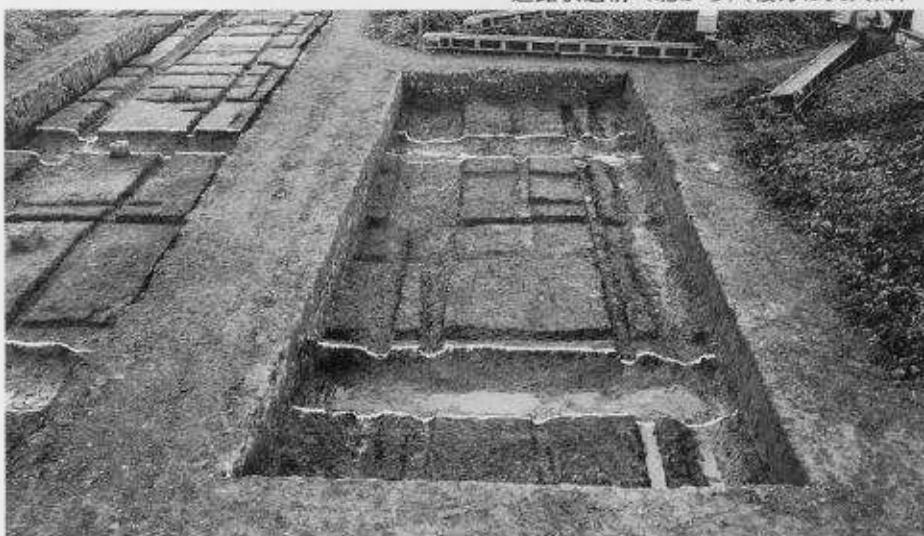
A区 SD-03・掘立柱柱穴群



道路状遺構（南から）



道路状遺構（北から）(後方は天久山)

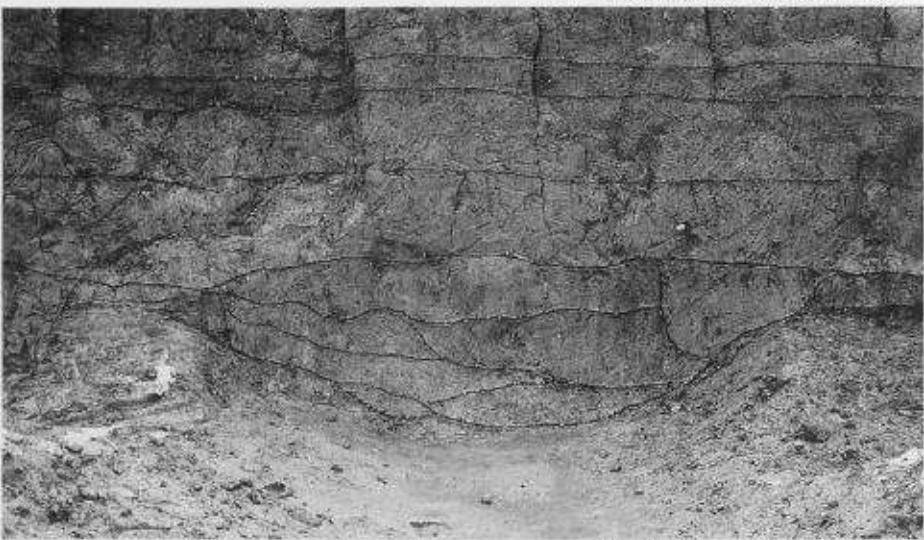


道路状遺構（西から）

図版  
6  
道路状遺構側溝及びSD-1  
03  
堆積状況



道路状遺構東側溝 (SD-01)

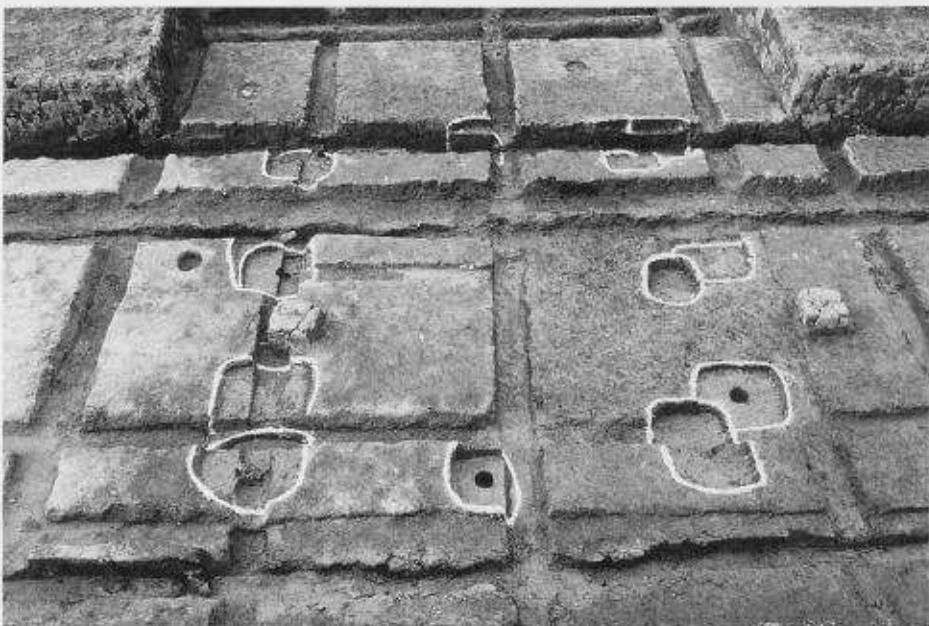


道路状遺構西側溝 (SD-02)



SD-03 堆積状態

図版  
7  
SB-01



SB-01 (南から)

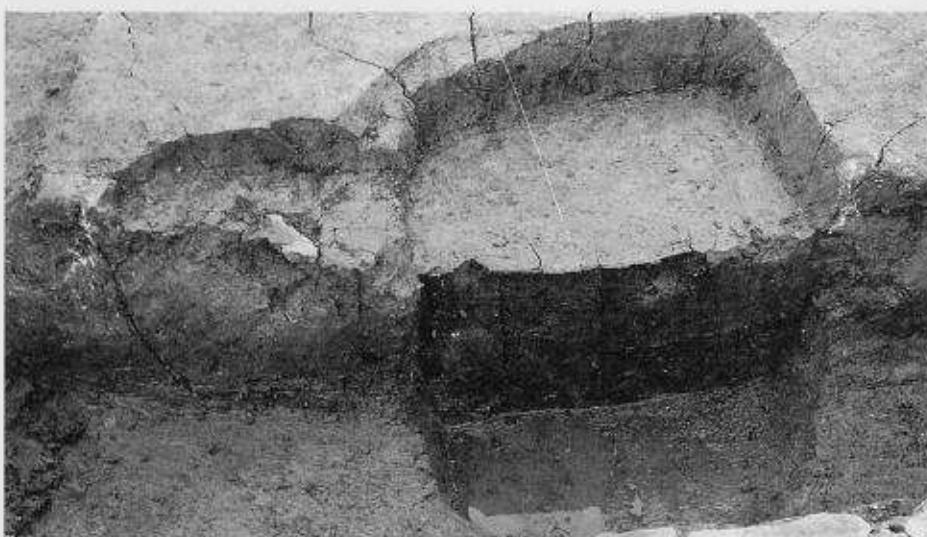


SB-01 (東から)

圖版 8

S B I 0 1

柱穴





SB-02 (北から)

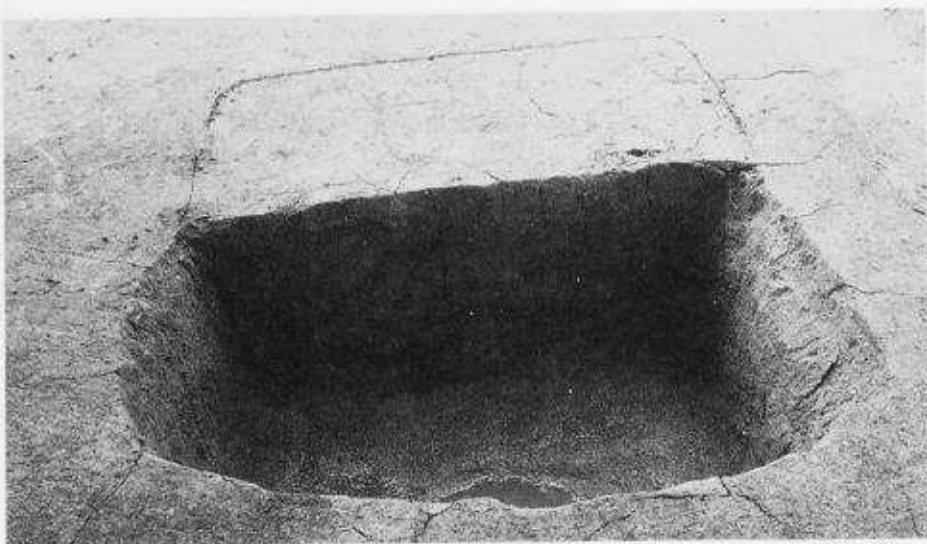


SB-02 柱穴断面 (P-1)

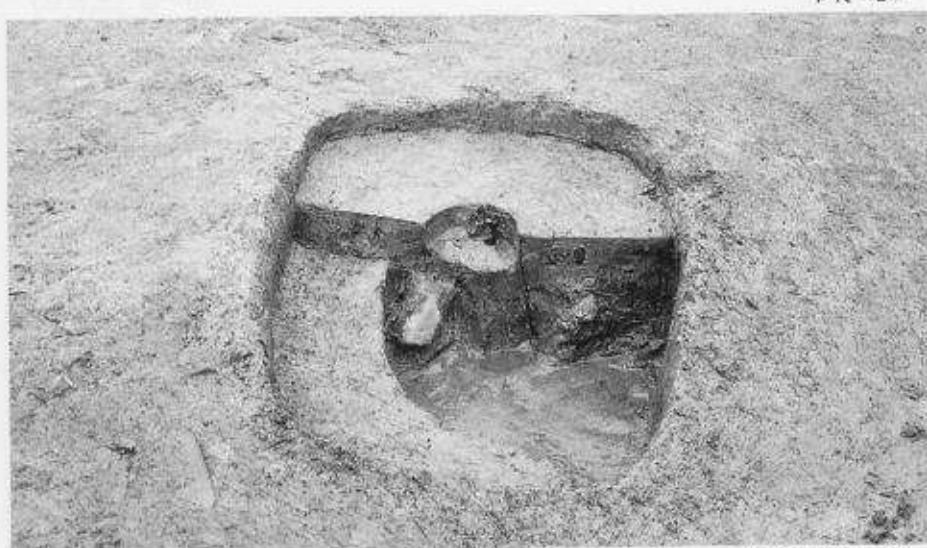


SB-02 柱穴断面 (P-3)

図版 10  
Pit - 24 · A区検出柱穴



Pit - 24



A区 Pit - 01



A区 Pit - 02

図版 11 井戸跡 (SE-101)



堆積状況



完掘状態（西から）



曲物設置状態（北から）

図版  
12

井戸跡 (SEI-01)

遺物出土状態



上層出土状態



上層出土状態



下層出土状態

7

9



9



7



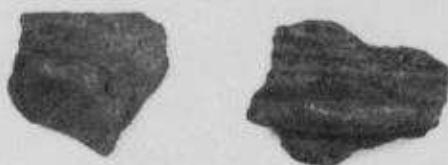
8



4



8

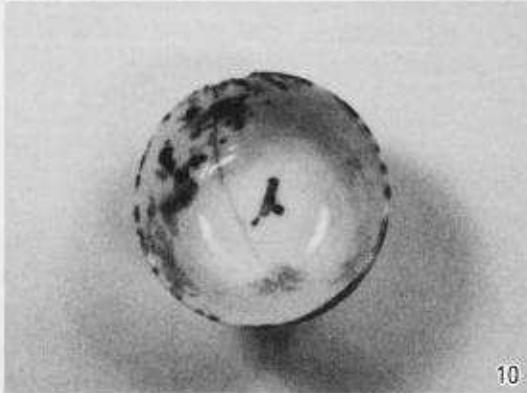




11



12



10



13



10



14



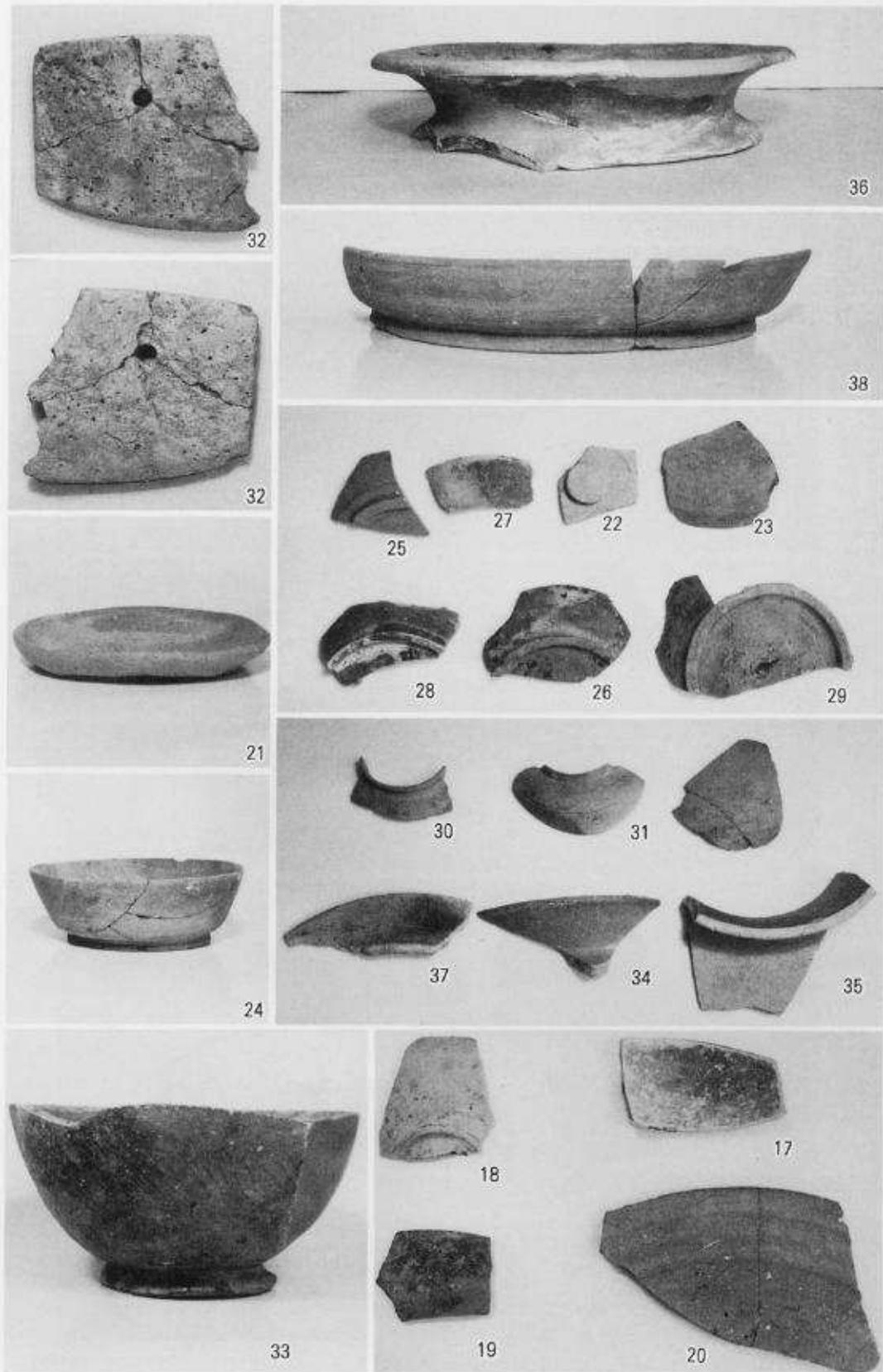
15



15

番号は図番号

圖版15 中世素掘溝及び遺物包含層出土遺物



図版 16  
道路状遺構側溝出土遺物



48



50



46



44



47



49



42



40



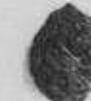
39



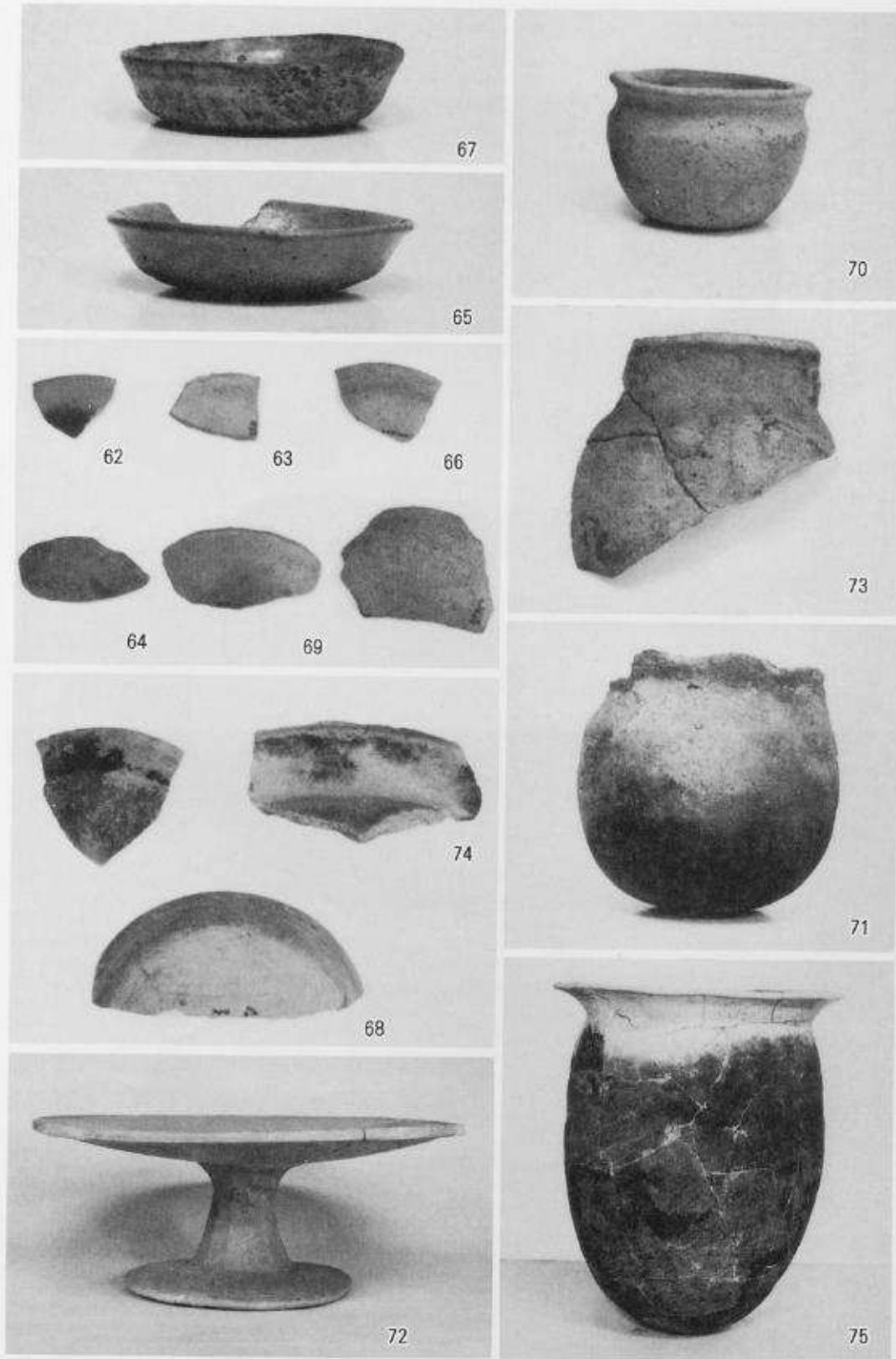
43



41



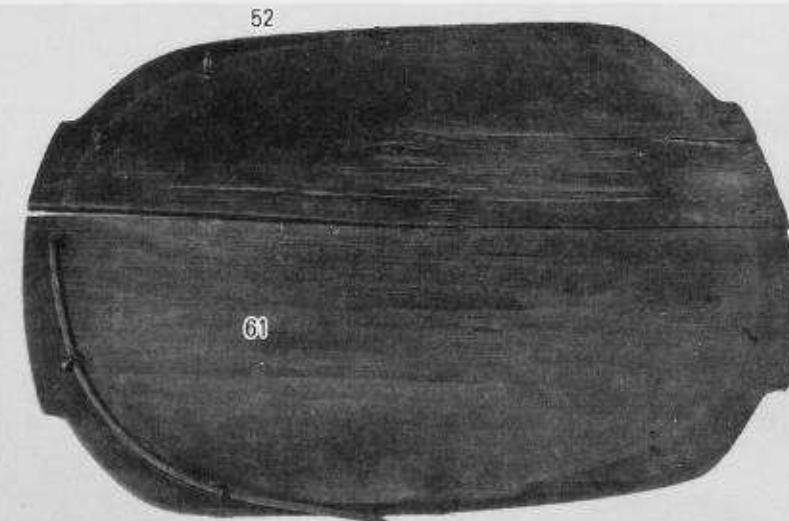
図版 17 井戸跡 (SE-101) 出土遺物



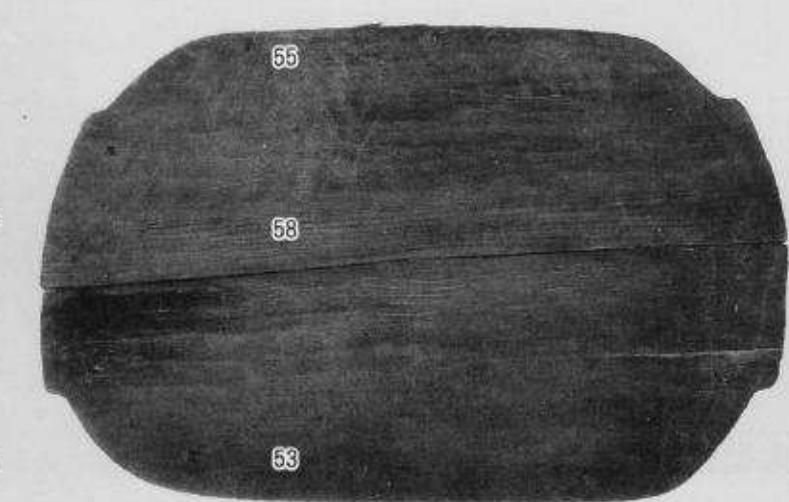
図版 18  
井戸跡 (SE-01) 出土遺物



54

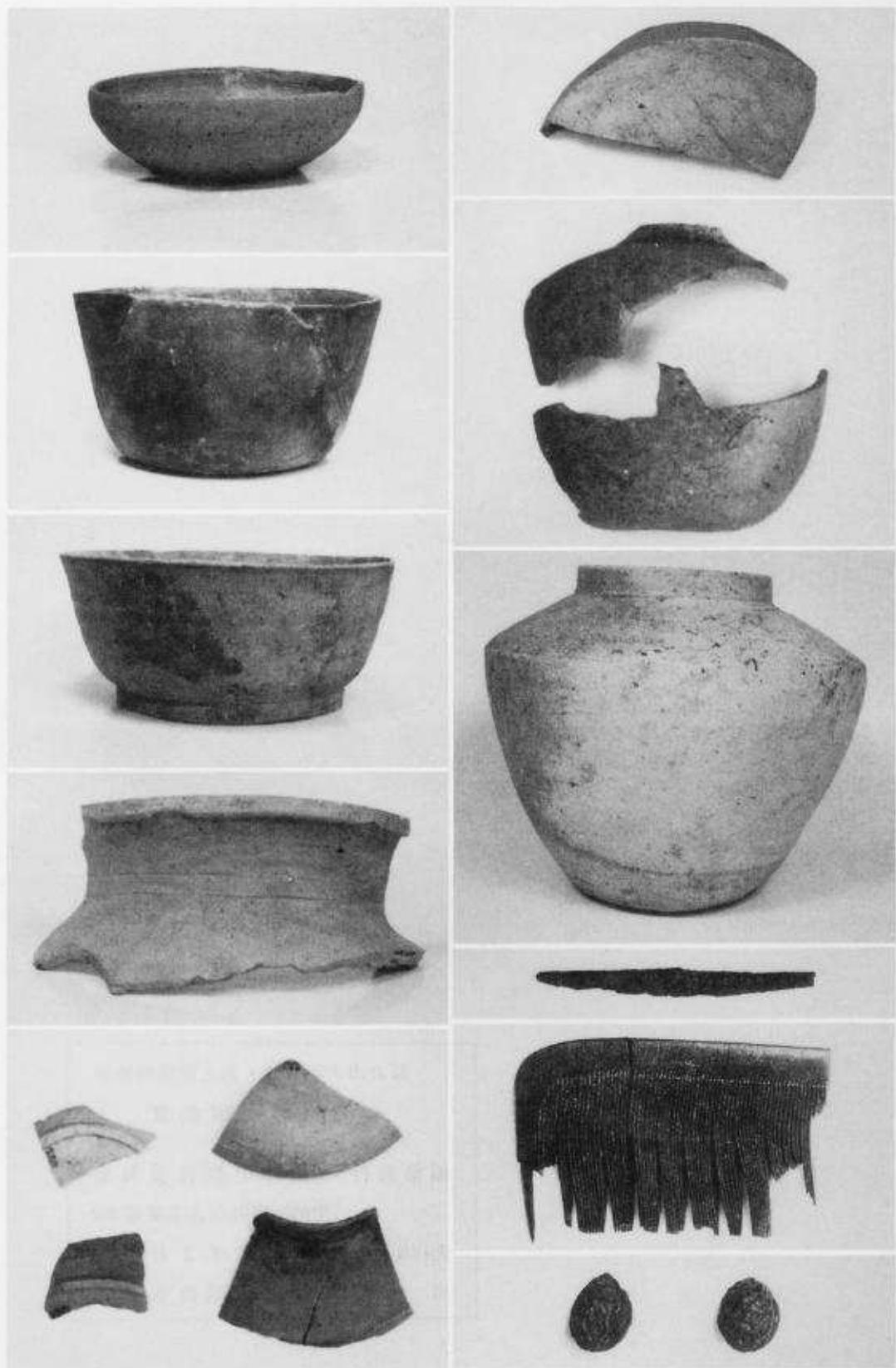


56



77

図版 19 井戸跡 (SE-01) 出土曲物



桜井市大福遺跡・西之宮黒田地区  
発掘調査報告書

編集発行 桜井市教育委員会  
〒633・桜井市大字栗殿202  
発行年月日 昭和62年3月31日  
印 刷 東洋印刷株式会社